

高知県における後期更新世・完新世の環境変化

—— 第四紀地質学的及び考古学的成果から ——

満塩 大洗¹・出原 恵三²

(¹理学部自然環境科学教室・²高知県埋蔵文化財センター)

Environmental Changes in the Late Pleistocene to Holocene Ages from view-points of Quaternary Geology and Archaeology in Kochi Prefecture, Southwest Japan

Taikou MITUSIO¹ and Keizou DEHARA²

¹Department of Natural Environmental Sciences, Faculty of Science,
Kochi University Kochi 780-8520 Japan

²Burial Culture Center of Kochi Prefecture, Nankoku 783-0006 Japan

Abstract: The writers surveyed the Quaternary System and archaeological sites in the whole Kochi Prefecture, Southwest Japan, and the followings are concluded: The Quaternary System was classified and described, and the environmental changes were clarified. Then the oldest archaeological site was the Okutani-minami relict of about 20,000 ybp of the Latest Glacial (Würmian) Age of the Late Pleistocene, consisting the Lower Terraces, as well as the Holocene strata forming the Alluvial Plains.

And the archaeological sites were as follows: the Paleo-Lithic ones were about 30 sites, the Jomonian ones about 200 and the Yayoiian ones about 400.

The Paleo-Lithic relicts were fluent in the western and central parts derived from the East Kyushu. The Earlier Jomonian sites showed the cultural interchange with South Kyushu, while in the Middle age the cultural interchange with Central Setouchi was found with the import of Kanaya sanukite (bronzite andesite). And in the Yayoiian Age, the Setouchi Culture came down to the famous Tamura Complex Relicts with the Middle Jomonian to Yayoiian, and the culture was spread out to the both west and east of Kochi Prefecture.

キーワード：高知県 第四系 段丘堆積物 環境変化 考古学遺跡 旧石器 縄文 弥生

はじめに

環境とは自然環境と人工環境とに大きく2分されるが、前者の自然環境としては水陸分布の変化に象徴される環境変化である。一方、後者の人工環境とは第四紀と呼ばれる、180万年前から現世までの地質時代以降に特に顕著に出現した、人類による自然改変の力が大きくなった特殊な時代であり、これらは主として考古学の分野で人類活動の諸遺跡・遺物などとして解明・研究されてきた。

そして、水陸分布の変化に象徴される自然環境の変化については、筆者の1人、満塩は1966年に

高知大学に赴任して以来、調査を開始してきて主として四国全体の陸上部を中心にした第四系の調査は現在に至っている。そのうち、全体を総括した主要なものは、香川県・高知県の水利地質図である^{6) 29)}。また、満塩・古川(1988)は四国地方を総括⁸⁾し、更に、それ以後の最新の第四系が満塩・加賀美(1992)によって総括¹⁴⁾され、環境変化に重要な物部川バリアを定義した(表1)¹⁾⁻²⁵⁾。更に、第四系は徳島県下でも殆どすべての主要河川流域の調査を満塩ほか²⁶⁾⁻²⁸⁾を行い、香川県全域でもそれらを総括し^{29) 30)}、更には、愛媛県の殆ど全域でもそれらを総括した^{31) 32)}。以上により、四国地方の第四系を明らかにしたので、南西部九州・南部紀伊半島・淡路島などにおいても、第四紀の環境変化を検討してきた^{33) 34)}。また、満塩ほかは海底下の地質についても調査し(図2)、特に第四紀における海水準の変動も検討してきた³⁵⁾⁻³⁹⁾。

一方、自然環境の諸変化は大気圏・岩石圏・水圏・生物圏の相互作用であり、この方面からも「その16部」まで報告してきたし、また、実験室的にも「その23部」まで解明してきた^{29) 34)}。また、第四系と関連して過去の旧海岸線と旧河川水路の形態を解明してきたのである。更に、各地の第四系の環境変化を追求しているなかで、考古学的な成果やいわゆる胎土分析と呼ばれる土器の詳細な化学分析の成果についても述べている^{16) 39)-41)}。

また、筆者の一人、出原は1987年頃から現在まで考古学方面的調査・報告を行ってきた^{65) 74)-81) 102)}。

ところで、考古学的研究については、岡本⁷⁹⁾が県下のそれまでの成果を最初に総括している。その後、1990年代になって、埋蔵文化研究センターが設立され、調査研究は飛躍的に増加した。

そこで、以下には現在までのこれらの総括として、筆者らが行ってきた海域と陸域から読み取られる第四系の環境変遷史、及び、考古学的成果の諸結果について、特に高知県下では最古のものは旧石器時代の約20,000年以降の南国市の奥谷南遺跡であり、これは地質時代では第四紀後期更新世の最終(ウルム)氷期であって、以下にもこれ以降の環境変化について述べる(図1)。またここでは、旧石器・縄文・弥生の各時代順について述べるが、高知県では前述のように、最古の遺跡は新

旧石器時代の約2万年前であるが、この報告では、中位段丘が形成された後期更新世の最終(リス/ウルム間氷期)間氷期以後の地層に限ることとする。

陸上・海底の地形・地質概要

高知県は太平洋に続く土佐湾によって囲まれた陸域である(図2)。その南方は太平洋に面しており、湾岸の総延長は約240kmもある。両岬を結ぶ直線距離は約

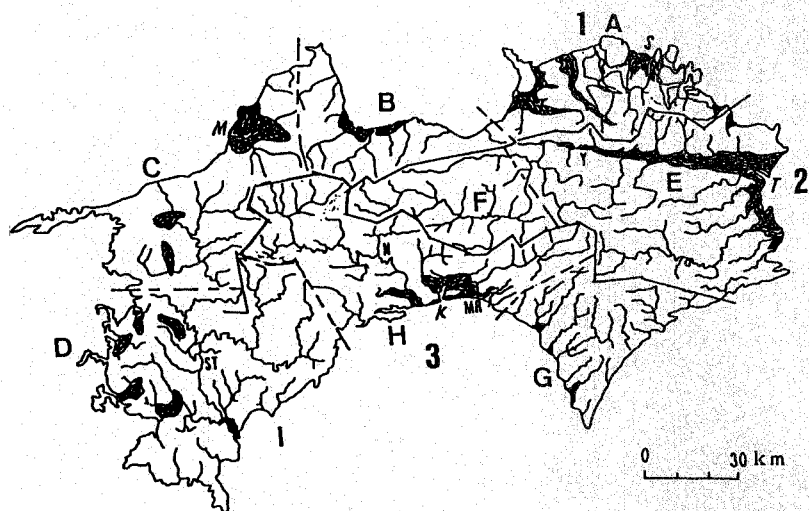


図1 四国の主要河川系及び高知県の位置

1. 北四国: A, 香川県 B, 愛媛県東予 C, 愛媛県中予 D, 愛媛県南予
 2. 中四国: E, 徳島県 Y, 吉野川中・下流域 F, 本山盆地(高知県吉野川上流域)
 3. 南四国: G, 高知県東部 H, 高知県中部 I, 高知県西部
- MR, 物部川バリア N, 仁淀川 ST, 四万十川 K, 高知市 T, 徳島市 S, 高松市 M, 松山市
注意) 高知県内の地域区分の G・H・I は、本論では C)・B)・A) に相当する。

120kmもあって、これに直交する奥行きは約60kmあって、内湾度は0.5の開口湾である。湾入深度は約900mの深海湾で、湾と言うよりむしろ、ガルフと呼ぶべきものである。また、土佐湾の陸棚は平坦面がよく発達し、四国の陸沿岸から南海舟状海盆（トラフ）に向かって発達し、この陸棚の約70%が水深100m以浅の部分によって占められている。大陸棚外縁の水深は-120~-170mで、そこから西方または北方向に発達している。中でも、陸棚は土佐湾陸棚平坦面と命名し、その幅は北東部の陸棚に対して、南西部のそれは約3倍もある（図2）。また、海底表層の堆積物は主として、

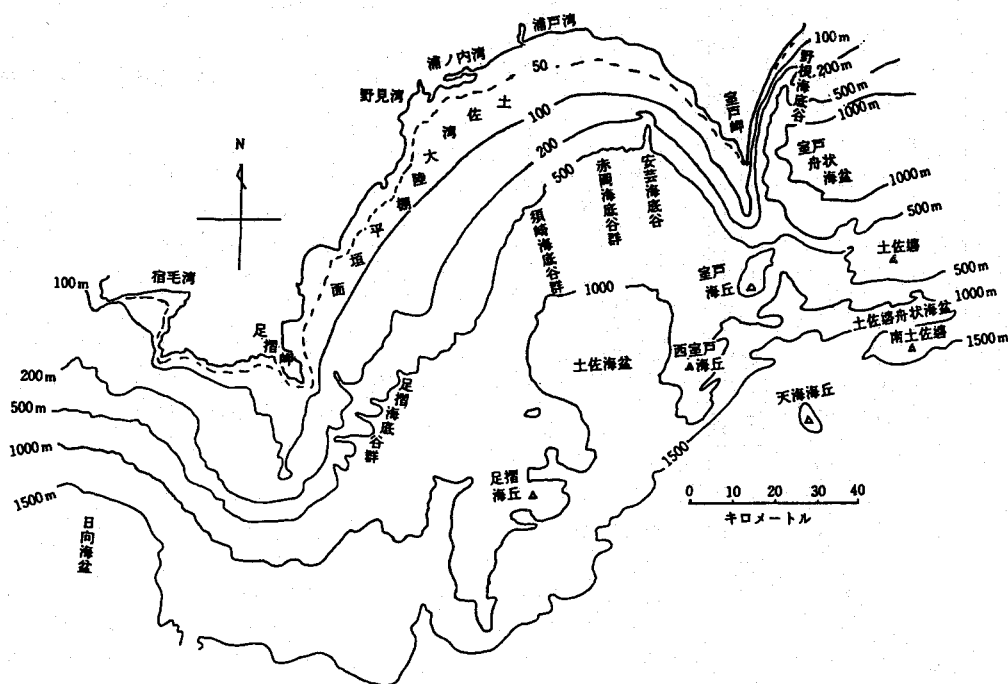


図2 土佐湾の海底地形（満塩，1976）³⁶⁾
数字は水深（m）

礫・砂・泥からなり、一部に貝殻破片も含む。

一方、陸上部では、四国の地形はほぼ東西方向の地質構造線に特徴づけられていて、山地・丘陵・段丘・沖積平野からなるが、河川系と完新世（沖積）平野は図1に示すように、ほぼ東西に発達している。また、高知県では山地が特徴的で約1,000m以下の高度で連なり、また、丘陵地は数100mの高度で連なる（図1）。

これらのうち、山地・丘陵の地質については、全体の基盤地質として累帯構造が特徴であり、北部から主に三波川帯の変成岩類・御荷鉾緑色岩類及び中部は秩父帯、更に、南部は四万十帯白亜系・第三系に特徴づけられる。そして、丘陵のごく一部を形成する先段丘は、第四紀の前期更新世（約180~80万年前）の砂礫層からなる。また、段丘はふつう4~3段みられ、これらは中期更新世（約80~14万年前）の高位段丘及び後期更新世（約14~1万年前）の中位段丘・低位段丘である（図3）。これらの段丘を構成している地層群は主として半固結あるいは未固結の砂礫層であり、これらは一般に薄く、また、堆積物を欠く浸食面の場合も多い。また、沖積平野は完新世（約1万年前~現在まで）の完新（沖積）層からなる。

また、石器などの石材としては、各時代において、各地質帯の現地に産する岩石類や各河川底の

表1 四国の第四系対比表

地 域		北 四 国		中 四 国	南 四 国 (高知県)		
時 代		愛 媛 県	香 川 県	徳 島 県	東南部	中央部	西南部
第 四 紀	完 新 世	沖 上 部 層 積 中 部 層 層 下 部 層	沖 上 部 層 積 中 部 層 層 下 部 層	徳 上 部 層 島 中 部 層 層 下 部 層	沖 上 部 層 積 下 部 層 層 最 下 部 層		
	更 新 世	低 位 段 丘 堆 積 物 II 清 重 層	低 位 段 丘 礫 層	昼 間 層	室 叶 古 町 層 津 岡 層 層 土 佐 山 田 層	久 次 層	浮 鞭 層
		高* 岩 広 野 松 岡 川 川 層	中 位 段 丘 礫 層	東 川 原 層 (MII) 半 田 層 (MI)	生*元*羽*叶* 見 層 根 木 層 層 層 層	能 植 茶 田 層	足*平* 摺 野 層 層
		上** 双** 芋 影** 海 地 平 層 層 層	高 位 段 丘 礫 層	中 西 層 **	久** 城**礼 琴** 新** 山 田 平 田 見 層 層 層 層 層		
	前 世	↑ 八*高 水 横*一* 倉 野 分 吹 本 層 子 層 層 松 層	最 高 位 段 丘* 礫 層	↑ 土 高 瀬 谷 川 層 層	↑ 舟 場 層 檀 山 層	↑	↑
		↑ 岡 郡 中 村 層 層	↑	柱 中 上 層 G	芸 安 芸 層 西 和 食 層 G 城 本 層* ↑ 唐 ノ 穴 内 層* 浜 G 登 層*	万 々 蹠 以 布 利 層 陀 旭 層 G 鹿 島 層*	
第 三 紀	鮮 新 世	後 期					

G：層群 *海成層を含む。 ** クサリ礫を含む。 * 扇状地性礫層を含む。

礫を原材料にしている物が多いが、時代が経過すると九州・瀬戸内地方などからの交易によって流入してきた石器もみられるようになる。

各時代の環境変遷を示す諸地層

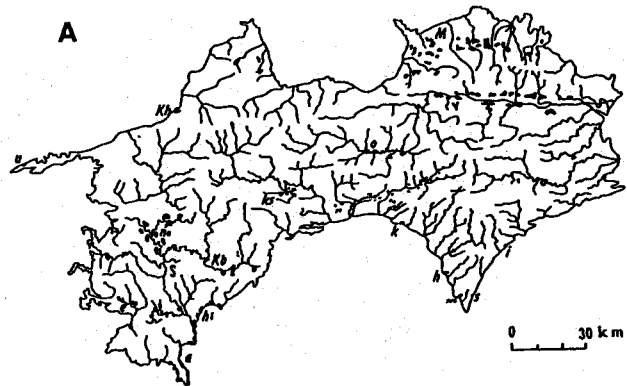
第四系の諸地層の総括については既に述べている^{18) 19)}ので、それらの文献を参照されたい。そこで、本論では後期更新世の中位段丘形成以降の、特に考古学では旧石器・縄文・弥生の各時代の環境変遷を表している諸地層について詳細に述べる(表1)。

なお、高知県は東西に長いので、以下には考古学に関する記述の章と同様に、A) 西部)・B) 中部・C) 東部の順に、古い時代から述べる。

1) 後期更新世＝中位段丘構成層（14万年前～5万年前） 図3A

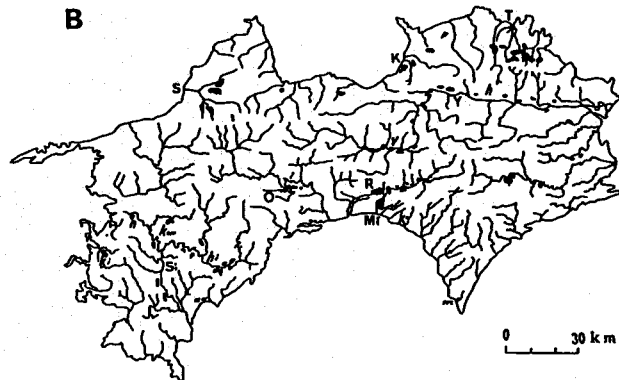
A) 西部，足摺方面では；広大な海成中位段丘を形成する足摺層・平野層などがある。また，中筋川流域には中筋層・戸内層がある。足摺層（高度約60～20m，層厚約10m+；三本・満塩，1981）・平野層（満塩・古川，1988）は，下部の古崖錐堆積物・中部の砂層・上部の海浜礫からなる。中部の砂層から貝・サンゴ・有孔虫などの化石類を多産する。これらの貝化石のうち，*Chama* sp. のアミノ酸年代測定により，138,600YBPの値が得られた^{22) 23)}。上部の黄褐色海浜礫は足摺半島周辺に広くみられる海成中位段丘面を作り，半島先端部がより高くなっている。平野層は四万十川河口の北岸付近から大方町まで達する。基盤に不整合に古崖錐がのり，その上に砂層・泥層が，最上部に礫層がのる。砂層・泥層から貝化石などを多産する。また，泥層の花粉分析結果では *Pinus*・*Fagus* が多く，暖帯性の *Lagerstroemia* や，同じく暖帯性シダの *Gleichenia*・*Pteris* の「とも棲み」がみられる。既に指摘しているように，本層には2回の赤色風化を受けた時期があり（高知第四紀研究グループ，1972），下部は1回目の風化を受けた間氷期に対応し，上部は2回目の風化の亜間氷期に対応される可能性がある。

また，中村市と宿毛市のほぼ中間には，下位より，古崖錐・中筋層・戸内層があり，ここでも粗→細→粗の堆積サイクルがみられる。戸内層は非海成礫層で，中筋層は海成泥層であって，*Ostrea gigas* などの貝類や有孔虫・花粉などの化石を産する。花粉化石は *Pinus*・*Fagus*・*Carpinus* などの北温帯種と，*Cyclobalanopsis*・*Lagerstroemia*・*Podocarpus* などの暖温帯性種と *Gleichenia* などの暖帯性シダ孢子があり，平野層と同様の「とも棲み」現象がみられる。中筋層は古土佐湾海進時の湾入を示し，この時期には中村市と宿毛市は古中筋チャンネルで連続していた（図9）。



四国の中位段丘構成層分布図
徳島県の吉野川流域では MⅠ・MⅡを含む。地名名がないのは中位段丘構成層。
〔北四国〕MⅠ：中位段丘構成層 KA：高野川層 a：内の浦層 m：小西野々層 f：岩松川層
c：広岡層
〔中四国〕V：平田層（MⅠ）・東川原層（MⅡ）を含む o：大瀬層（本山盆地）
〔南四国〕t：生見層 s：権名層 m：元層 A：羽根層 k：叶木層 n：龍茶山層 o：楠原層
h：窪川層（川奥層を含む） S：四万十川 Ai：平野層
a：足摺層

四国の第四系

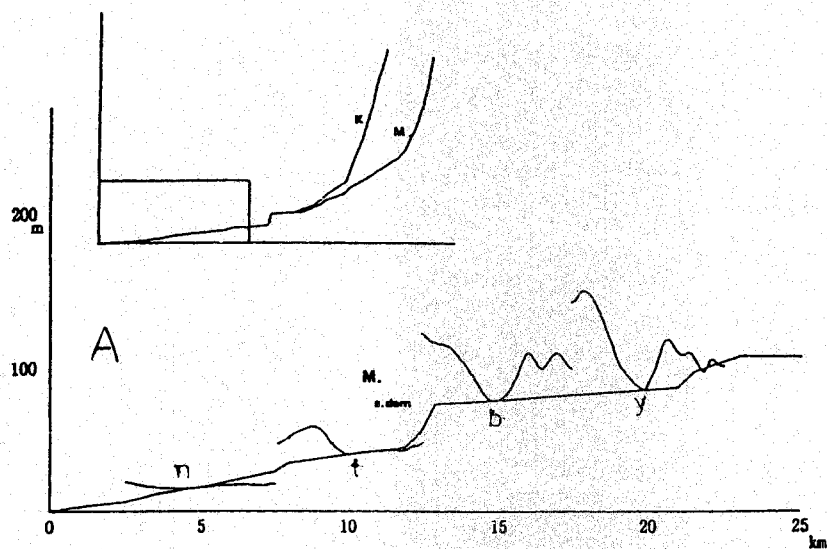


四国の低位段丘構成層分布図
愛媛県・高知県では LⅠ・LⅡを含む。地名名がないのは低位段丘構成層。
〔北四国〕T：低位段丘構成層 K：四音寺 S：重信川 南子：km：川上層 No：中組層 Ai：清見層
〔中四国〕V：吉野川 A：笠岡層 o：上奈呂層
〔南四国〕Mr：物部川バリエー R：新石盆地 m：室津層 A：叶岡層 O：越知盆地 f：井岡層 Si：四万十川 Ai：弘瀬層 u：浮瀬層

図3 四国の第四紀後期更新世の中位段丘・低位段丘構成の地層分布図

A. 中位段丘構成層（約14万年前）

B. 低位段丘構成層（約4万年前）



Profile along the lower and middle stream area of the Monobe River.
 M, Monobe River K, Kami-Nirou River s.dam, Suita dam n, Nankoku City
 t, Tosa-Yamda Town b, Birafu, Kahoku Town y, Yoshino, Kahoku Town

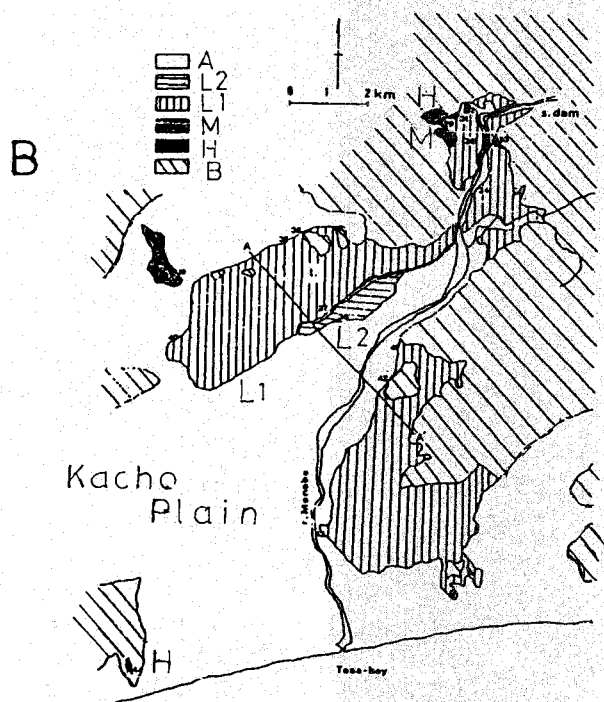


図4 物部川の河川縦断面(A)及び下流部の第四紀地質図(B)

B, 基盤岩類 H, 高位段丘=琴平層 M, 中位段丘=佐野層 L I, 低位段丘 I = 土佐山田層 L II, 低位段丘 II = 古町層 A, 沖積層

注意) 物部川東岸では、河口付近より手結岬西方付近まで佐野層相当の中位段丘の浸食平坦面が続き、この岬以東は最高位段丘 II の舟場層(前期更新世)相当より古い浸食平坦面であることが分かる。

B) 中部, 高知市周辺～物部川流域付近では; 非海成の中位段丘を構成している。物部川流域では全域にある: 上流部の根木屋層, 中流域の有瀬層, 下流域の佐野層である。また, 根木屋層(分布高度約300～250m, 層厚約10m)は半クサリ礫からなる。有瀬層(分布高度約190～140m, 層厚約5m)も半クサリ礫からなる。佐野層(分布高度約100～50m, 層厚約5m)は亜円状の半クサリ礫で, 上部に黒ボクがのる。上韭生川流域の韭生層(分布高度約330～200m, 層厚約10m)は黄褐色亜円状の新鮮～半クサリ礫層からなり, 層間に泥層を挟む。また, 山間小盆地での谷相層(分布高度約340～310m, 層厚約5m)は, 半クサリ～クサリ礫からなり, 盆地の中心に向かって斜めに配列している。本層は2部層からなり, 礫種は上部層では砂岩が多く, 下部層ではチャートの占める割合が大きい。なお, 図4には県下で最広の香長平野周辺の第四紀地質図のみを示している。

領石盆地では植田層(高度約60～45m, 層厚約5m; 高知第四紀研究グループ, 1974)であり, 殆ど大部分は礫層であるが, 下部には約1mの泥層があり, 花粉分析結果では *Alnus*・*Corylus*・*Quercus*・*Ulmus* が多く, その他に *Fagus*・*Pinus*・*Abies*・*Picea*・*Tsuga*・*Cryptomeria* があって, 氷期を示す。

中央部の高知市では大谷層・能茶山層があるが, 後者(分布高度約20～5m, 層厚約10m+)は下部は巨礫層で, 中部は暗灰色泥層で, 上部は中～細礫層となり, 粗・細・粗の堆積サイクルがみられる。中部の泥層は江戸時代から続く「尾戸焼」の原料であり, その花粉分析結果は *Abies*・*Tsuga*・*Betula* などの針葉樹と, *Symplocos*・*Cyclobalanopsis* などの広葉樹の「とも棲み」を示す。

また, 大谷層(高度約20～10m, 層厚約10m+; 満塩ら, 1966)は礫層と泥層からなり, 前述のように, これらの地層も古仁淀川の東流を示す。

なお, 仁淀川流域の佐川・越知盆地にも, 中位段丘構成層があるが, ここでは省略する。

C) 東部, 室戸半島方面では; 海成中位段丘は局部的で, 約20～10mの面を形成し, これらは西より, 叶木層・羽根層・元層・椎名層・生見層があり, 古土佐湾海進によって堆積したものである。叶木層(分布高度約10m, 層厚約5m)は狭長な平坦面を作り, 砂礫・泥の互層で, 後者からは *Gleichenia* などの暖地性のシダ・*Myrica* などの暖地性の花粉・貝類・キチン質有孔虫などの諸化石を産する。また, 羽根層(分布高度約20～10m, 層厚約10m)は主として円礫層からなる(満塩・安田, 1989)。元層(分布高度約20～10m, 層厚約5m)は黄褐色の半クサリ砂礫層からなる。更に, 室戸半島の東岸では, 椎名層(分布高度約10m, 層厚約5m)は, 黄褐色の半クサリ海浜礫層からなる。東端の生見層(分布高度約15～10m, 層厚約5m)も, yellow tuff を基質とした海浜礫で, 基盤の第三系砂岩にのっている。なお, 物部川河口の東部付近には, 図4の説明文にあるように, 中位段丘の浸蝕平坦面が東部の赤岡町付近までみられる。

以上は, 本論の基本となるもので, 次には低位段丘について述べる。

2) 後期更新世＝低位段丘構成層(5万年前～1万年前) 図3B

A) 西部, 足摺方面: 四万十川流域の弘瀬層(分布度約210～40m, 層厚約4m)のみがあり, 新鮮な礫層である。下流域に低位段丘が無いことは, この川は別の方に流れていたことを示す。

また, 大方町の浮鞭付近の浮鞭層(分布度約10m, 層厚約2m)はかなり締った新鮮な礫層で, 上部に黒ボクをのせる。

B) 中部, 高知市周辺～物部川流域付近～本山盆地: ここでは特に, 考古学的に重要な物部川流域について述べておく(図4)。なお, この川の前古流域が特に縄文人・弥生人の生活に影響していると考えられるので, この河道の変遷を図8に示しておく。この川の上流域の影層, 中流域の美良布層, 下流域での2段の低位段丘礫層Ⅰの土佐山田層・低位段丘礫層Ⅱの古町層であり, 上韭生川流域では大板層, 山間小盆地では中谷層が低位段丘構成層である。

影層(高度約510~200m, 層厚約10m)は亜円~円状の新鮮な礫層で, マトリックスの色相は灰黄褐色である。

美良布層(高度約170~90m, 層厚約10m)は上部には黒ボクがのる円礫層である。これは中流域に珍しく広い平坦面を構成し, この上に美良布の中心街が開けている。

低位段丘LⅠの土佐山田層(高度約45~15m, 層厚約20m)は円~超円状の新鮮な礫層であり, 固結度はルーズで, この層の上には黒ボクがのっている。須江の露頭では泥層を挟んで上に佐野層がある。また, 本層の下位には泥層が含まれ, 花粉分析結果は寒帯要素があり, 氷期を表す。また, 野市町の物部川左岸(東岸)側にも広くみられ, 層厚は約2mである。

低位段丘LⅡの古町層(分布度約30~20m, 層厚約5m)は新鮮な礫層で, マトリックスの色相は黒色で, 上部に淡色の黒ボク(2次黒ボク)がのっている。

表2 高知県下の完新世の自然環境変化

年	時	代	岩	相	環 境	気 候
1500	完	RⅢb	上	砂 礫	淡 水	やや 冷 (南温帯)
		RⅢa	粗 粒 相		半 鹹 性 海 成	
4000	新	中	下 部	泥 砂	海 成	暖 (南温帯)
6300				~~~~~ 泥		
8000		RⅠ	細 粒 相	砂	海 成	冷 (西温帯) (南温帯)
10000	世	前 期	最 粗 下 粒 部 相	砂 礫 ピート	半 鹹 性	
	更 新 世	後 期	粗 粒 相	砂 礫	半 鹹 性 淡 水	

☒ 礫地火山灰(赤ホヤ=K-Ah)

RⅠ・RⅡbなどは中村による区分

大板層(分布度約290~110m, 層厚約15m)は新鮮な礫層からなり, その上に黒ボクがのっている。

山間小盆地の谷相地区では中谷層(分布度約290~270m, 層厚約10m)で, 赤紫色土層を間に挟む礫層である。

領石盆地では久松層である(高知第四紀研究グループ, 1974)。

なお, 高知市付近の地表には本層はみられず, これは地下に潜っていて, 洪積第1砂礫層とされているものである(図5の2のL)。

C) 東部, 室戸半島方面: 室津層(高度約18m, 層厚約5m; 満塩ら, 1977)は, 3枚の角礫層と3枚の泥層からなり, この泥層からは *Picea* などの「きゅう果」や木片・花粉化石を産出し, 木片の¹⁴C年代測定結果, 約25,000 YBPの値が得られた。この値は最終(ウルム)氷期を表し, また, 花粉分析の結果も寒冷な気候を示す。叶岡層(高度約13m, 層厚約0.5m+)はピート層で, 叶木層を削りこんで堆積しており, 花粉分析結果では *Abies*・*Picea* などの寒冷要素の氷期を示している(満塩・野田, 1976)¹²⁾。

3) 完新世=沖積層(1万年前~現在)

完新世は完新層(沖積層)からな

る、いわゆる沖積平野を形成している。これは高知平野(形態からは、半盆地と呼ぶべきである)を合わせた香長平野以外には広いものはないので、ここでは県下全体について述べる(図5)。なお、室戸・安芸・芸西・高岡・須崎・中筋川流域・宿毛などにも狭い沖積平野がある。

本層の下部は室津川の河岸に露出している(満塩ら, 1971)。芸西平野は北から南に向かって、ほぼ三角形をなしているが、これは典型的な扇状地状の地形、及び、後背湿地 Back-marsh と礫シ Gravel spit の地形がみられる。また、物部川河口付近の上平における露頭では、礫の形状は円～超円礫であり、色相は灰色で、マトリックスは砂質である。領石盆地では常通寺島層である(高知第四紀研究グループ, 1974)。

これらの沖積平野下の地質については、主要な平野の地下地質構造を図5に示している。これらの詳細は満塩(1998)¹⁹⁾を参照していただき、ここでは表2・3に区分表を示す。これらを簡単に総括すれば、完新統(沖積層)は中村・満塩ら(1972)、満塩ら(1977)と小椋・満塩ら(1989)、及び、満塩(1998)が四国全体や高知県全体について総括しているように、最下部・下部・上部の各部層からなる。更に下位には、高位段丘から低位段丘に相当する各堆積物がある(満塩ら, 1988; 小椋

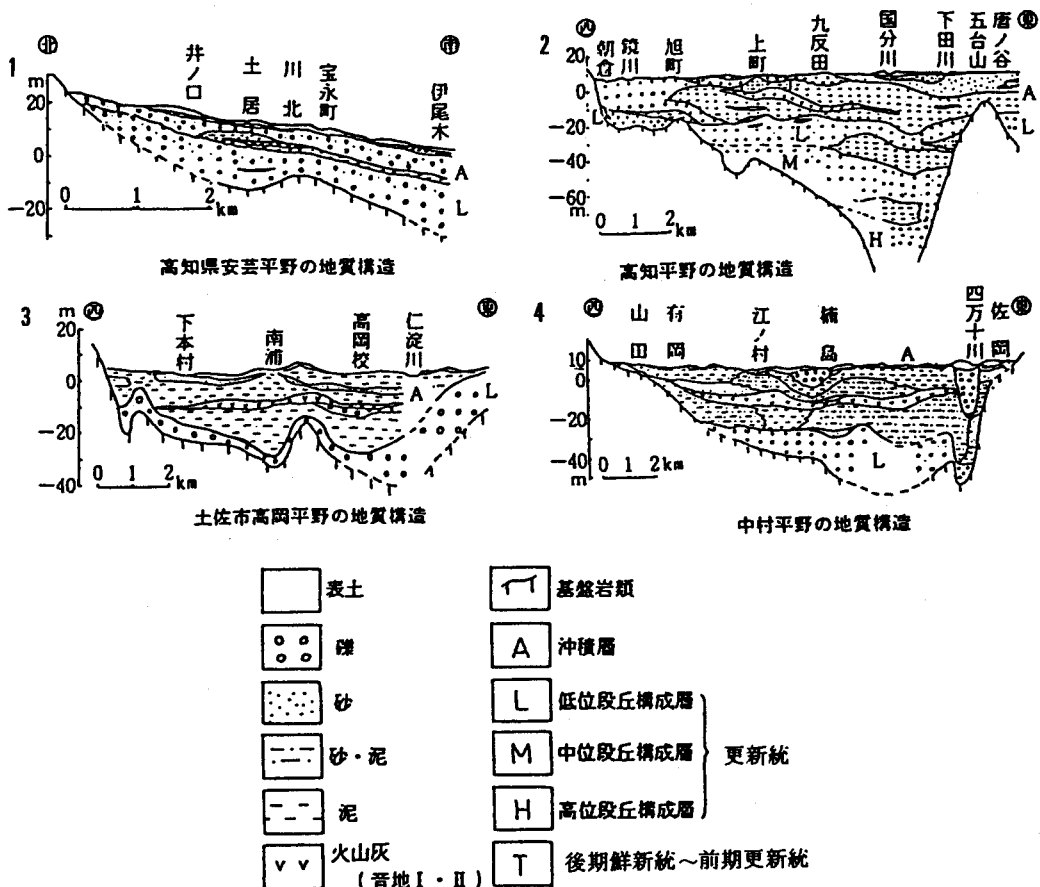


図5 高知県における主要な沖積平野下の地下地質

1, 安芸平野 2, 香長(高知)平野 3, 土佐市高岡平野 4, 中村平野

Tの後期鮮新世～前期更新世は先段丘構成層で、地下では仁淀川河口付近以外はみられない。なお、高岡平野などの詳細は文献16を参照。

ら, 1989).

環境の具体的な変遷

これらのことから以下には、特に、後期更新世以後の土佐湾周辺の古環境を復元しよう。

その前提として、図6の1(上段)には、南四国におけるネオテクトニクスを示しているが、これによって後期鮮新世から前期更新世にかけて、土佐湾周辺の陸上・海底の地形・地質がどのようにして形成されたかが分かる。また、図7には中位段丘を形成した古土佐湾海進以後の海水準の変動を示している。

これらを平面的に示したのが図9・図10であるが、前者の上段(A)は先段丘構成層の後期鮮新～前期更新世である東部の芸西層群・西部の蹉跎層群が形成された頃の古地理を示す。この時期には古土佐川(古仁淀川は西方から高知市を通過して、東流し、高位段丘の城山層及び中位段丘の能茶山層を堆積させた)は高知の半盆地を形成し、古物部川と後川付近で合流していたと考えられる。

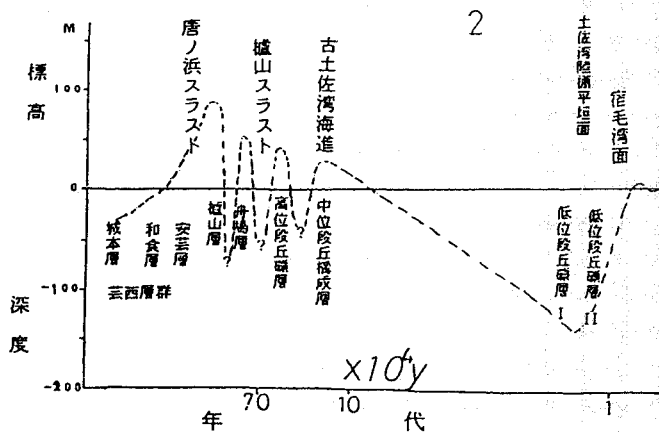
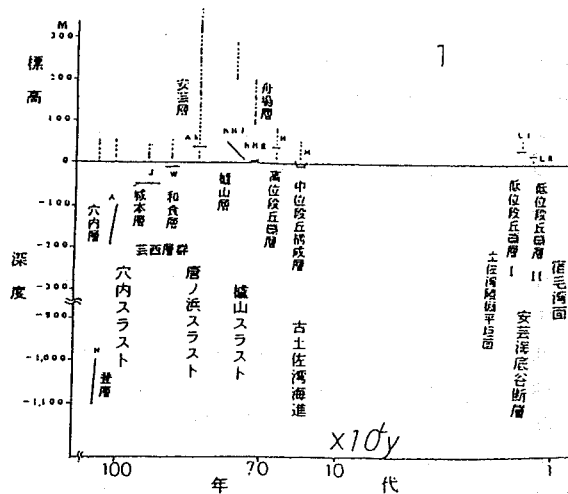


図6 南四国の土佐湾周辺におけるネオテクトニクス(A)及び海水準変動(B)の概念図

一方、四十万十川の中・上流域には高・中位段丘がある。既述のように、これらから古四十万十川は西から東方に流れていたのが、中位段丘形成後に極めて大きな変動を受けて、流路を現在のように東から西方に流れているような大変化が想定されるが、更に南方には古中筋チャンネル(海峡)があって、中村市と宿毛市はつながっていた。

更に、中位段丘形成時には古土佐湾海進があり、約30mも海水準が現在より高かった。この頃の古地理は図9の下段(B)に示すように、古中筋チャンネルは依然として存在し、足摺方面には広大な海成中位段丘を形成していたが、東部では上昇的な傾向のために、局地的に分断された海成中位段丘を構成している叶木層・元層・羽根層・生見層などが点在しているに過ぎないのである。

ついで、図10には最終(ウルム)氷期最盛期(1.9万年前)以後の最大の海退が起こった際の古海岸線を示している。これによって、土佐湾の陸棚平坦面が形成されたが、東部の室戸側では狭く、西部の足摺側ではその約3倍もある広さ

を示している。また、地形については、西部では平常であるが、東部では上昇的であることを示している。それ故に、東部の室戸側で見られる「栢山面」・「舟場面」は古くて、前期更新世としてしているのである。つまり、低位段丘面形成の頃には、海水準が約-140mも低下するような氷河期で寒かったので、陸域が拡大していたことが分かる。

最後に、図10の下段(B)には1万年前の古環境を示すが、この年代は更新世と完新世との境の年代であり、考古学的には旧石器時代と縄文時代とのほぼ境界の年代である。

これらを総括して、土佐湾周辺から解明された海水準変動の概念図は図6・7である。これによって、高知県の第四系の段丘や沖積平野などの形成史や理由がわかる。

これに対して、地震や津波などのように、急激に起こる海水準・地盤の変動がある。これらをまとめて、図6には南四国の土佐湾沿岸でのネオテクトニクスについて示しているが、これから、前期更新世から高位段丘形成時までには、穴内・唐ノ浜・楯山の3つのスラスト（逆断層）があり、変動が大きかったことを示している。

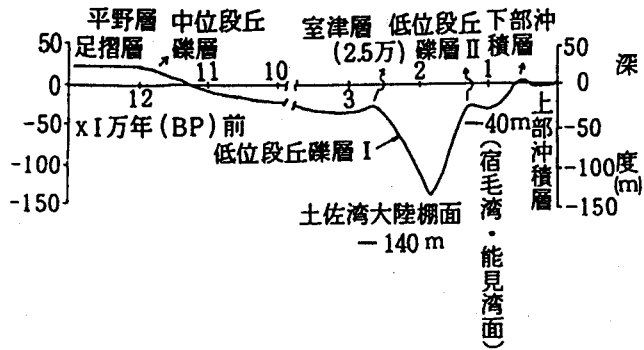


図7 土佐湾周辺の海水準変動の概念図
低位段丘礫層 I = 土佐山田層, 低位段丘礫層 II = 古町層

環境変化の一証拠—物部川旧河道（チャンネル）の変遷

航空写真から判読した物部川の旧河道チャンネルの変化は、図8のように、旧河道は前述の古物部川と密接に関連している。中位段丘形成までは、新改を通して領石盆地に至っていた古物部川は、最終（ウルム）氷期以後には現在の南国市の平野を南下するようになったが、この主流は現在の位置より西方を流れて、高知空港西の後川に連なっていたものである。一方、古物部川から新改川に連続していた旧河道は、新改付近を南西方に進み、北西からの領石川と比江付近で合流していた。しかし、これらの旧河道の地下には、前述した古仁淀川と合流していた更に大きな河川（古土佐川）が後川付近で合流していたと考えられる。更に、浦戸湾はまだ土佐湾には開いていなくて、それ故に、植物学会で顕著な事実である、菊属の分布が物部川を挟んで東西において、シオギクとノジグクのように、それらの種類が違うことが合理的に説明できるのである。

海水準変動による環境変化

図5には高知県下の主要な沖積平野下の地質構造（小椋・満塩ら，1989）を示している²⁶⁾。これらの内、安芸平野は土佐湾に直接面しており、香長（高知）平野・高岡平野・中村平野は直接には海に面していない。しかし、4者とも地下の構造はほぼ共通していて、完新世の沖積層の下位には更新世の低位段丘構成層があることである。そして、高知平野の半盆地の地下では、更に中位段丘構成層（地表では能茶山層）や弘下台の地下にみられる高位段丘構成層（地表では城山層）が存在していることである。これらによって、現在の仁淀川は中位・高位段丘が形成される頃には、東流し

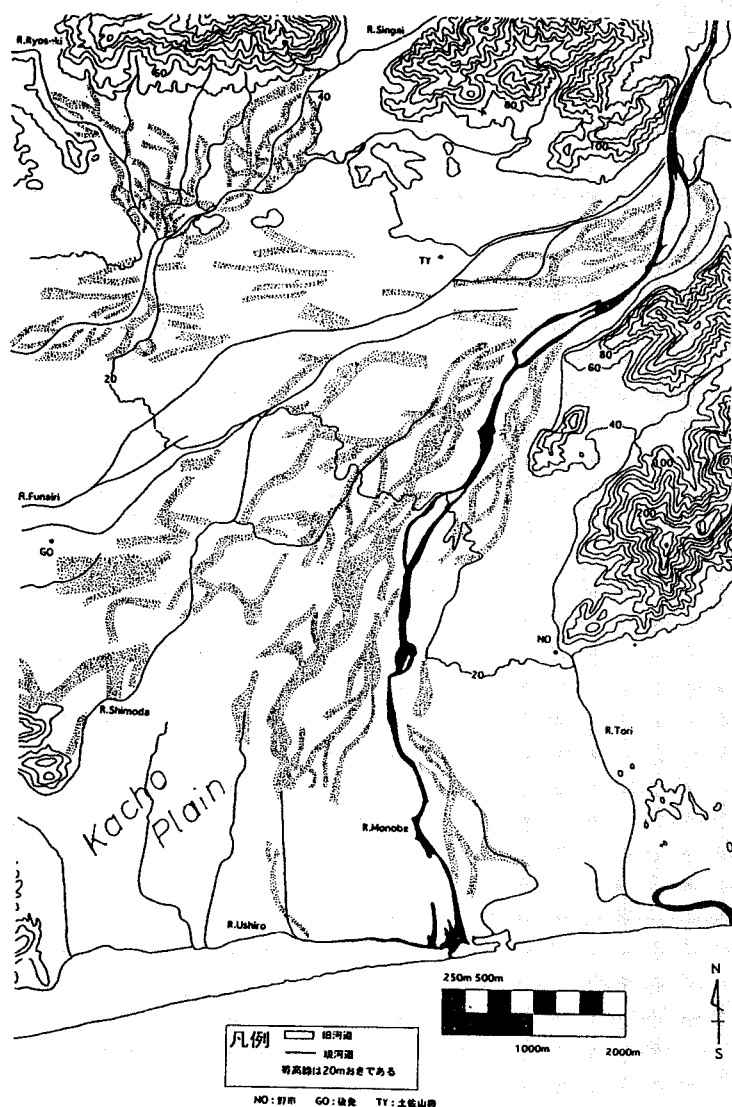


図8 物部川下流部における旧チャンネル変遷図

北部は鎮石盆地で、高位～低位の段丘があり、複雑な旧チャンネル群がみられる。物部川下流部流域では香長平野で、高位～低位の段丘があつて、旧チャンネル群は北東から南西方向に発達しているが、後述の田村遺跡付近では安定していることが分かる。

次には、考古学的事実についても、高知県の西方から東方へと、すなわち、A) 西部・B) 中部・C) 東部の順に、また、年代は1) 旧石器時代から、2) 縄文時代、3) 弥生時代について、次章に順番に述べる。

旧石器時代～弥生時代の遺跡分布

高知県下における考古学的遺跡のうち、ここでは、1) 旧石器時代・2) 縄文時代・3) 弥生時代

ていたことは前述した。

更に、高岡平野をほぼ東流する波介は、現在の仁淀川を横切って、春野町の新川川に合流して、土佐湾に流入していた。

以上により、各平野下でも、また、地表上の段丘でも、各地層は海と陸のせめぎあいによって形成されていることがわかる。そこで、海が陸に浸入する現象を海進 Transgression と呼び、反対に、海が退く現象を海退 Regression と呼称している。たとえば間氷期のように、気候が暖かくなって海水準面が上昇して海進が起り、氷期では反対に寒くなって、両極や山岳氷河が発達すると海退が行われることになる。これは氷河制海水準変動と呼称されている。他には地盤の緩慢な上下運動もあり、これはエパイロジェニシス Epirogenesis と呼ばれている。

一方、地震活動による急激な海進(津波)によっても、水陸分布の変化が劇的に起こることはよく知られている。

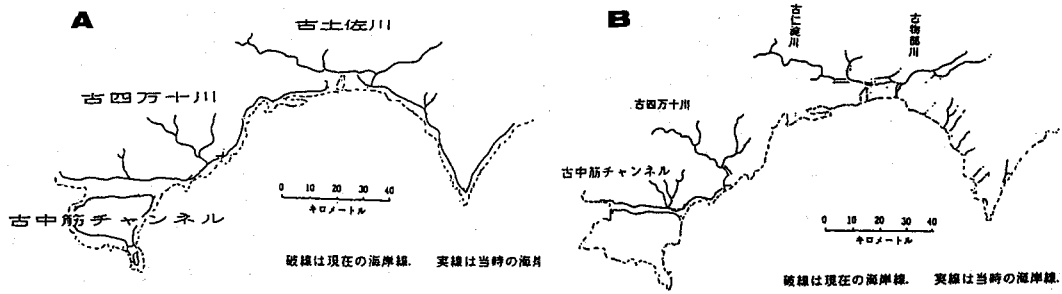


図9 土佐湾周辺での古地理の変化, 1

A, 先段丘形成時の頃(約80~20万年前) B, 中段丘形成時の頃(約20~14万年前)

表3 高知県下の主要な考古学遺跡の年代表

時代	地層	花粉帯	絶対年代	考古学年代	主要遺跡の名称
第四紀	完新統	R III b	1500	古墳時代以降	田村遺跡
		R III a	2250~2350	弥生時代 後期	
				中期	
				前期	
				縄文時代 晩期	
	中世下部	R II	4000	縄文時代 後期	奥谷南遺跡(南国市岡豊)
			6300	中期	
			8000	前期	
			10000	早期	
		R I		草創期	
更新世	後期	L		旧石器時代	

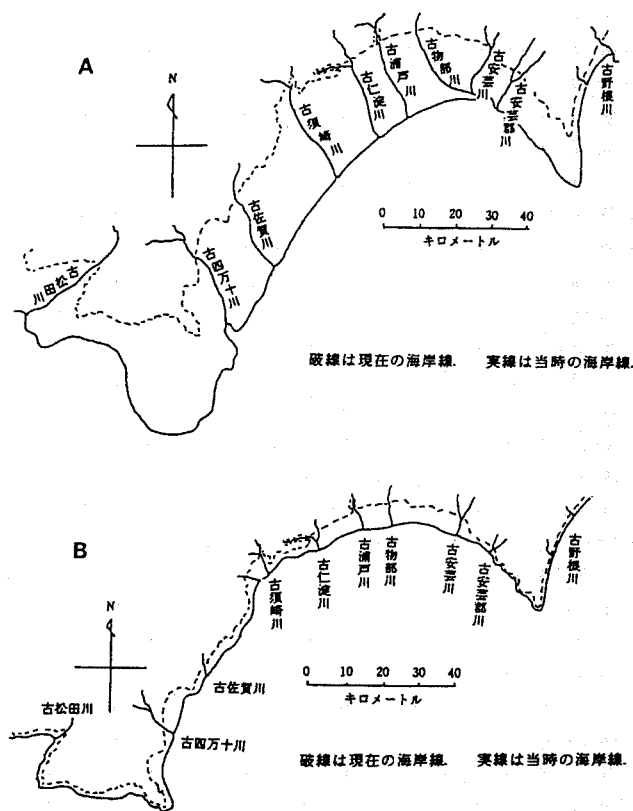


図10 土佐湾周辺での古地理の変化, 2
A, 低段丘形成の頃(約2万年前)
B, 沖積平野形成の頃(約1万年前~現在)

ないことである。もっとも、A)の愛媛県境に近い同県御荘町の和口遺跡からは、まとまった翼状剥片や、それを素材とした国府型ナイフ形石器が出ていたので、このA)地域でも今後発見される可能性が高いであろう。しかし、石材は現地産の四万十帯のチャートや頁岩であり、縄文時代以降のように瀬戸内や九州からの石材の搬入は殆ど認められない。すなわち、身近に入手可能な石材を使って、それらに規制された石器製作がなされている。つまり、A)ではチャートと頁岩が見られるのに対して、B)では殆ど例外なく、チャートで占められている(図12)。

このように、旧石器時代は瀬戸内側とは大きく異なった展開をしていること、更に、A)とB)でも様相がかなり相違していることが明らかになりつつある。しかし、C)地域ではこれまでのところ発見されていない。かくして、南四国の旧石器時代の研究も本格的に開始されるようになって、黎明期から発展期になりつつある。

以下には、これらの主要な遺跡について述べる。

A) 西 部

1・影野地遺跡(図1-1)

高岡郡梶原町初瀬奈呂の四万十川の支流、北川川左岸の河成低位段丘上にあり、遺跡の標高は320m、北川川との比高差は20mである。地元の考古学研究者西本則夫氏によってナイフ形石器が採

までの遺跡について、A)西部・B)中部・C)東部の順に述べる。

1) 旧石器時代

まず、この時代の遺物は、近年まで高知市の高間原古墳の床敷石中から採集された細石核が殆ど唯一のものであり、南四国の旧石器時代は空白的な状況が長く続いていた。しかし、1990年代以降、遺跡の発見や発掘調査が相次ぎ、今日では約20の遺跡が確認されている(図11)。その分布は、A)西部の海成中位段丘の足摺層・平野層上や、四万十川・新庄川などの主要河川流域に多いが、最近ではB)中部の高知平野縁辺の丘陵麓や高位・中位段丘上からの発見が相次いでいる。C)東部では未発見であるが、これらは恐らくA)~C)の全県下に分布していることも予想される。

これらの遺跡のうち、特にB)の奥谷南遺跡や新改西ノ谷遺跡のような注目すべき成果もあがっている。

さて、南四国の旧石器時代の特徴は、瀬戸内で盛行するいわゆる翼状剥片素材のナイフ形石器がほとんど認められ

表4 旧石器時代の遺跡一覧表

NO	遺跡名	NO	遺跡名	NO	遺跡名
1	影野地遺跡	8	ナシヶ森遺跡	15	高岡原遺跡
2	八足遺跡	9	大内遺跡	16	奥谷南遺跡
3	広井畠遺跡	10	平野茶園遺跡	17	新改西ノ谷遺跡
4	鶴山遺跡	11	深海中位段遺跡	18	太平・佐野遺跡
5	油ノ上遺跡	12	深海中位段遺跡	19	永野遺跡
6	宇須々木遺跡	13	竜ヶ迫遺跡		
7	竜ヶ迫遺跡	14	竜ヶ迫遺跡		

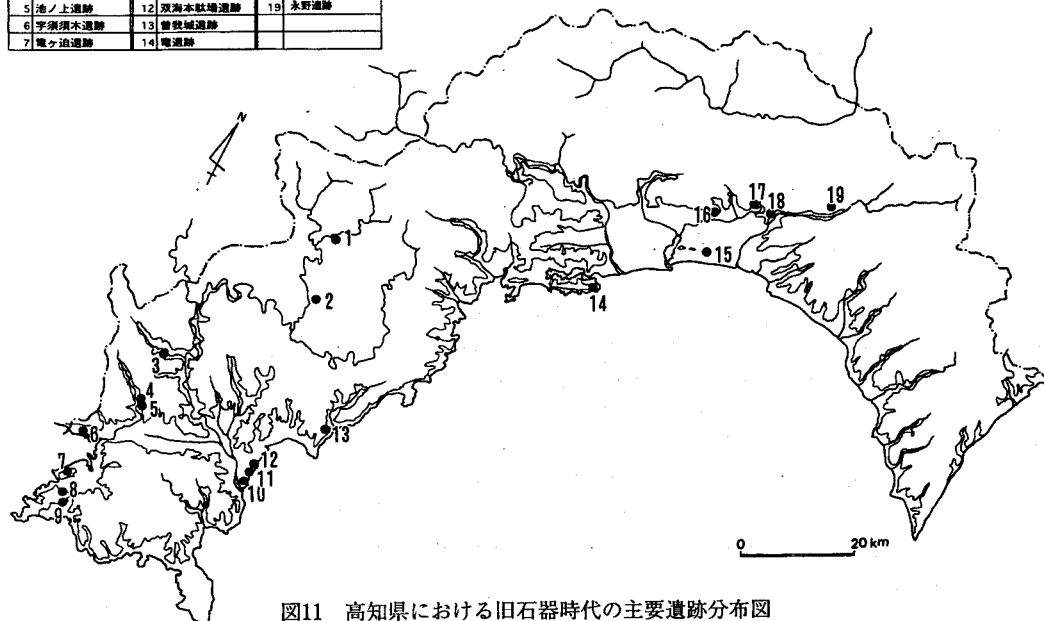


図11 高知県における旧石器時代の主要遺跡分布図

集・発見されたもので、後述のように、縄文前期の遺跡として有名である。これは全長(現長)4.8 cm・幅2.0 cmであり、岩質はチャートの横長剥片を利用している。本例は県下で発見された最初のナイフ形石器である⁴⁴⁾。

2・宇須々木遺跡(図11-6)

宿毛市宇須々木ハナマエの宿毛湾北側に舌状に突出した浸蝕中位段丘上にあり、標高は約10 mである。横剥ぎ素材を使ったナイフ形石器が1点採集されていて、石材は長さ5.2 cm・幅1.6 cmの頁岩である^{45) 46)}。

3・竜ヶ迫遺跡(図11-7)

大月町竜ヶ迫の宿毛湾南に突出する浸蝕中位段丘上に立地し、標高約20 mである。竜ヶ迫天満宮参道でナイフ形石器が表採されたことから、旧石器時代の遺跡として注目され、1992年に発掘調査がなされた。その結果、採集資料と併せてナイフ形石器3点・縦長剥片2点・横長剥片2点・横長剥片石核1点が確認された。ナイフ形石器の岩質はサヌカイト(古銅輝石安山岩)・頁岩・砂岩である。これらは横長剥片を素材とする点で共通しているが、それぞれのタイプは異なっている。他の剥片や石核の岩質は頁岩である⁴⁷⁾。

B) 中 部

1・奥谷南遺跡(図11-16)

南国市岡豊町小蓮の香長平野に向かって開けた小扇状地の最奥部にあり、標高は約25 m前後である。背後には四国山地に連なる山塊が迫り、遺跡のすぐ後方には、秩父帯のチャートの巨大な露頭が屹立して岩陰状をなしている。1995・96年に調査が実施され、旧石器時代～縄文時代早期を中心とする遺物が各層位ごとに出土しており、注目を集めている。Ⅷ層が旧石器時代終末の層準で細石

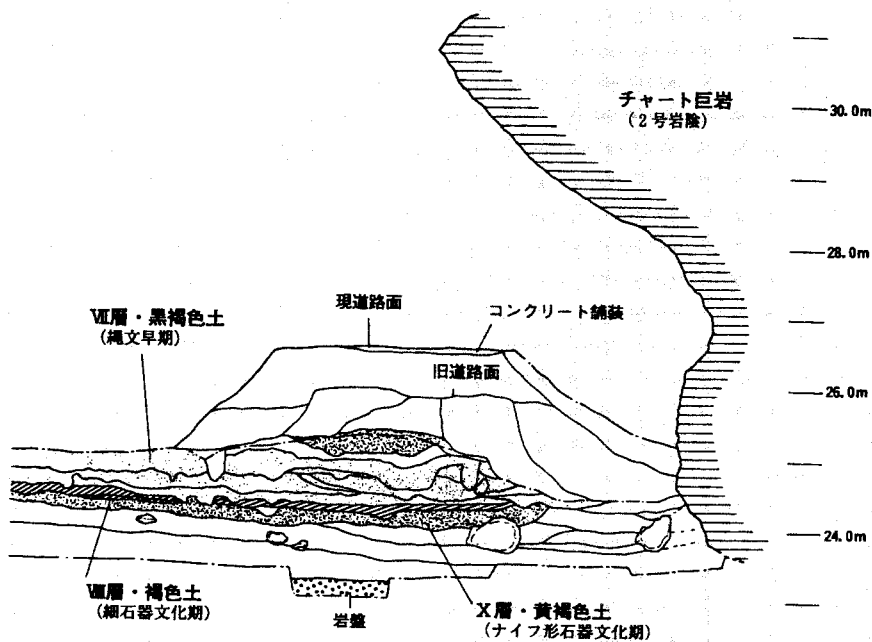


図12 奥谷南遺跡2号岩陰の堆積状況 (松村・山本, 1996).

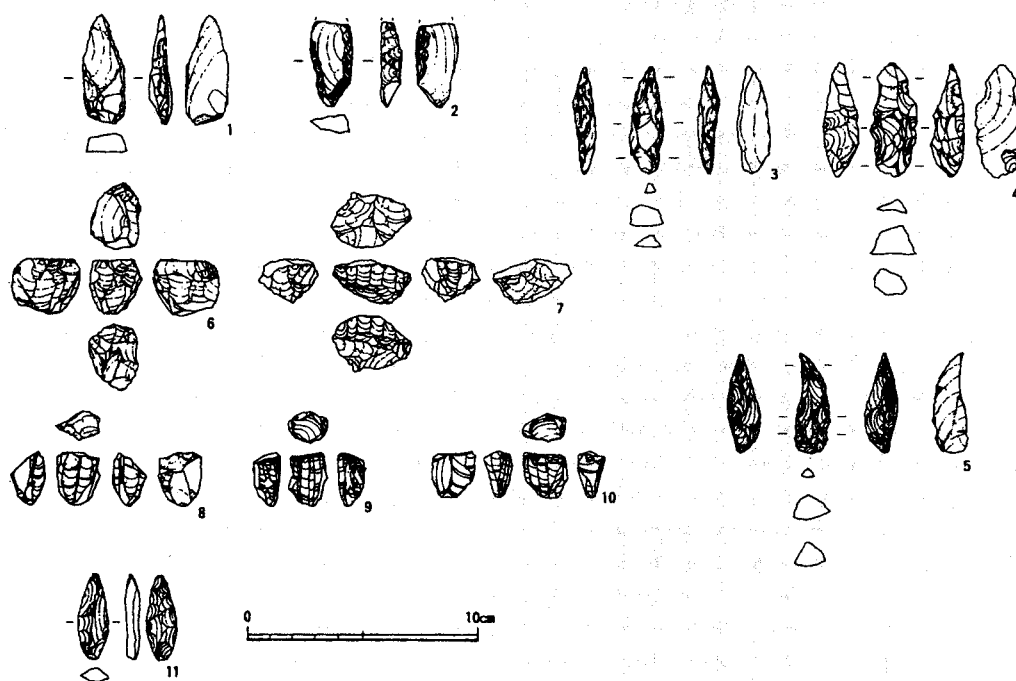


図13 奥谷南遺跡出土の旧石器時代の出土遺物 (松村・山本, 1996).

1・2: ナイフ形石器 3～5: 角錐状石器 6～10: 細石核 11: 槍先形尖頭器

器が出土し、下層のX～Ⅺ層からはナイフ形石器や角錐状石器が出土した。これらの石器類は1万5千点にも及ぶ。主要なものはナイフ形石器53点・角錐状石器13点・細石核144点・細石刃410点を数える。これらの石器は出土の層準あるいは石器形態から3時期に区分できる。すなわち、ナイフ形石器の2時期（角錐状石器を伴う段階とナイフ形石器が小型化した段階）と細石器の段階である。これらの岩質は例外的に頁岩が認められるが、それ以外は全てチャートである。ナイフ形石器には横長・縦長の剥片素材が見られるが、瀬戸内技法は全く見られない。細石核には船野型、野岳・休場型に分類される。当遺跡は質・量共に南四国最大の旧石器時代遺跡である⁴⁸⁾。

2・新改西ノ谷遺跡（図11-17）

これは香美郡土佐田町新改西ノ谷にあり、奥谷南遺跡と同様に国分川水系に属し、上流約7kmの地点にある。やはり、南に開口した谷部斜面に立地し、標高は約75mである。圃場整備に伴う発掘調査で、60点に及ぶ小型ナイフ形石器が出土した。これらの石器の岩質は全てチャートで、15・16世紀の遺物包含層中から出土し、原位置を保っているものではない。しかし、周囲の状況から考えて、この付近には当該期の遺跡があることは相違ない⁴⁹⁾。

2) 縄文時代

縄文時代の遺跡は、現在のところ約300箇所が確認されている。これらの分布は、A)西部のA-1)沿岸部・A-2)四万十川流域、及び、B)中部においてはB-1)仁淀川流域・B-2)物部川流域・B-3)吉野川流域の5つの地域群に区分できる。更に、A-2)ではA-2-1)の上流域・A-2-2)の中流域・A-2-3)の下流域と中村平野に細分される（図14）。しかし、C)東部では発掘調査の事例がなく、その実態は現状では不明と言わざるを得ない。

これらの中で最も遺跡が集中するのは、A)西部の海成中位段丘と四万十川流域で、実にこの時代全体の7割近くを占めている。しかし、中部でも近年の分布調査や発掘調査の増加に伴って、新たな遺跡が発見されるようになった。そして、B)中部の遺跡の特徴は、田村遺跡や西分増井遺跡・柳田遺跡などのように、河成段丘上に加えて沖積平野下での発見が相次いでいることである。これらの遺跡は従来は弥生時代から開始される遺跡として理解されていたものであるが、それらが縄文時代後・晩期にまで遡ることは、自然環境や生業・土地開発史などを考える上で重要な問題を内包している。

すなわち、縄文時代としては時期的にもいくつかの特徴を指摘することができる。まず、草創期・早期ではオープンサイトと共に、岩陰遺跡や洞穴遺跡が見られることや、標高の高い主要河川の中・上流域に立地することである。これは旧石器時代からの連続性によるものであろう。この傾向は前期にも引き継がれる。中期の遺跡は極めて少ないが、末葉になると、B)の奥谷南遺跡や林田シタノザ遺跡のように、沖積平野の縁辺部への進出が認められる。後期になると、遺跡数が飛躍的に増加すると共に、全県下的に平野部への進出が見られ、遺跡の規模も大きくなる。これは、当該期の縄文遺跡がピークに達した直後頃における安定した沖積平野の形成によって達成されたものであろう。この傾向は香長（高知）平野において顕著である。後期末から晩期前葉は再び遺跡数が減少するが、晩期中・後葉には沖積平野を中心に分布が広がり、特にA-2)四万十川とB-1)仁淀川の下流域に多く認められる。しかし、四万十川の上・中流域からは、この時期に一斉に遺跡が消える。C)東部には先段丘（前期更新世）の海成段丘¹¹⁾¹³⁾上に遺跡が見られるが、その実態は不明であり、この地域の実態把握が南四国縄文研究の緊急課題である。

次に、文化内容について検討しよう。まず、草創期においては、B-2)の奥谷南遺跡から隆帯文土器が出土している。これは既述のように、南九州との交流を示すものである。また、金山産サヌカイトもこの時期から本格的に流入するようになり、南北交流のクロスロードとして縄文時代の

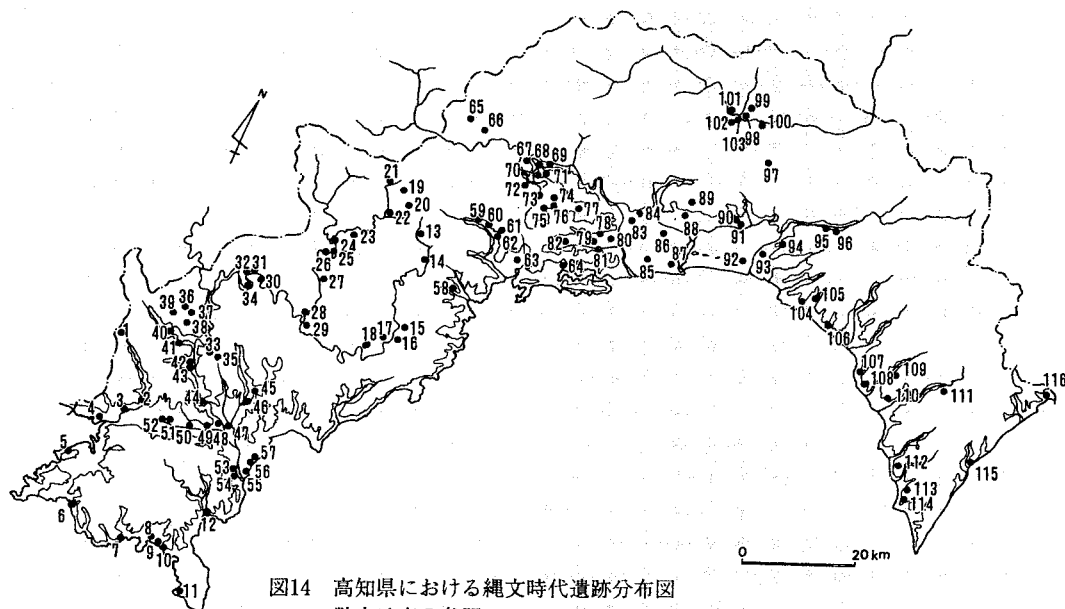


図14 高知県における縄文時代遺跡分布図
数字は表5 参照

当初から南四国の位置付けが可能である。A-2-1)の木ヶ内遺跡出土の鑿状磨製石斧は「黒潮文化圏」を彷彿させるものがある。前期は西部を中心に九州の姫島産黒曜石が轟B式土器と共に入り、瀬戸内からは羽島下層式土器文化が南下して西部で交会する。中期の資料は少ないが、全体的に瀬戸内的な様相を帯びる。南四国の後期文化はB-3)の松ノ木式土器に代表される。これは中部瀬戸内の福田K2式土器と南四国の宿毛式土器の両者の特徴を持ち、両者の中間地帯の吉野川上流域で盛行する。まさに、南北文化の融合を象徴する土器型式として位置付けることができよう。他に類例を見ない有文浅鉢や多量の粗製深鉢の存在、更に、広域にわたる分布などのように、松ノ木式土器は縄文後期の大きな画期を示すものである。また、鐘崎式土器がB)高知平野でまとまって出土するなどのように、中期に途絶えていた黒潮交流の復活として理解することができよう。晩期では再び中部瀬戸内からの影響が強く見られるようになり、特に、晩期中・後葉においては、B)高知平野の土器は中部瀬戸内的なものになってしまう。A)西部の土器は中村1式土器のように、西九州豊後地方との共通性が見られるものの、石材ではもはや黒曜石は殆ど見られず、讃岐産のサヌカイトが多く入っている。このように、縄文晩期の南四国は、香長平野を中心にして中部瀬戸内からの影響を強く受けるようになるが、このことが来たるべき弥生文化の成立に大きく関係してくるのである。

以下には、縄文時代の遺跡中で、発掘調査等によってその実態が明らかになっている事例の中で、特に重要と考えられるものについて述べる。

A) 西部の遺跡

A-1) 沿岸部

1・橋上遺跡(図14-2)

宿毛市橋上字岡添他の松田川右岸の河成中位段丘上³¹⁾の標高22~24mにあつて、松田川との比高差は8mである。木村剛朗氏によって多量の縄文土器・石器が採集されていて、土器は晩期中・後葉の中村I・II式が最も多く、ついで前期の轟B式、後期後半の伊吹町式である。石器は打製石

表5 高知県下の主要な縄文時代遺跡一覧表

NO	遺跡名	時期	NO	遺跡名	時期	NO	遺跡名	時期
1	笹平遺跡	草～前期	41	広井駄場遺跡	早・前期	81	倉岡遺跡	晩期
2	橋上遺跡	前・後・晩	42	ひろぞう遺跡	後期	82	徳安遺跡	草創期
3	二ノ宮遺跡	"	43	鳥打場の下遺跡	"	83	奥名遺跡	
4	宿毛貝塚	中・後期	44	三里遺跡	"	84	大デキ遺跡	
5	竜ヶ迫遺跡	前・後期	45	大用遺跡	中・後期	85	西分増井遺跡	後期
6	尻貝遺跡	後期	46	奈路駄場遺跡	早～後期	86	柳田遺跡	晩期
7	片粕遺跡	中・後期	47	中村貝塚	晩期	87	チドノ遺跡	前期
8	下益野A地区遺跡	後期	48	入田遺跡	"	88	宇津野遺跡	後期
9	下益野B地区遺跡	前・後期	49	船戸遺跡	後・晩期	89	正蓮寺不動遺跡	"
10	松崎遺跡	中～晩期	50	国見遺跡	中・後期	90	奥谷南遺跡	草・早期
11	唐人駄場遺跡	前～後期	51	久保畑遺跡	晩期	91	栄工田遺跡	後・晩期
12	下ノ加江遺跡	後・晩期	52	ツグ口橋下遺跡	"	92	田村遺跡	後期
13	船戸遺跡	早・前期	53	間崎遺跡	中期	93	町田堤東遺跡	早期
14	岩土	"	54	初崎遺跡	前・後期	94	林田シタノジ遺跡	後・晩期
15	仁井田遺跡		55	平野茶園遺跡	早・前・後	95	太郎丸遺跡	早期
16	根元原遺跡		56	双海中駄場遺跡	早・前期	96	美良布遺跡	早・晩期
17	仕出原	中期	57	双海本駄場遺跡	"	97	飼古屋遺跡	早期
18	川口遺跡		58	楠ノ川遺跡		98	松ノ木遺跡	前～晩期
19	音吾郎遺跡	後期	59	永野遺跡	前～古期	99	長徳寺遺跡	早期
20	北川遺跡	"	60	姫野々上町遺跡	晩期	100	銀杏ノ木遺跡	"
21	高野遺跡	前期	61	新土居宇津ヶ敷遺跡		101	静岡遺跡	後期
22	下折渡遺跡	早期	62	新土居遺跡		102	玉屋敷遺跡	前・後期
23	影野地遺跡	前期	63	岩永遺跡		103	八反坪遺跡	晩期
24	中平遺跡	"	64	切畑遺跡		104	北屋敷遺跡	
25	庄司ヶ市遺跡	後期	65	坂本太平遺跡	早・後期	105	清水遺跡	
26	影地	早期	66	竹ノ内遺跡		106	道北遺跡	
27	木屋ヶ内遺跡	早・前期	67	清水遺跡	草・早期	107	境谷遺跡	
28	江師遺跡	早期	68	坂東遺跡	"	108	源七遺跡	
29	森駄場遺跡	草・早期	69	中ノ芝遺跡	"	109	井ノ岡遺跡	
30	小野遺跡	後期	70	女川遺跡	後期	110	岡地遺跡	
31	十川駄場崎遺跡	草～後期	71	庄田遺跡		111	小島遺跡	
32	川口ホリキ遺跡	前・後期	72	遊行寺遺跡		112	灘大岡	
33	堂ヶ市遺跡	後期	73	城ノ台洞穴遺跡	早期	113	傍土山遺跡	
34	広瀬遺跡	前～後期	74	桂遺跡		114	北カリヤ遺跡	
35	棟屋敷遺跡	早・前期	75	不動ヶ岩屋洞穴遺跡	草・早期	115	ゴセン遺跡	
36	上藪ヶ市遺跡	前・後期	76	柏原遺跡		116	高尾遺跡	
37	沖遺跡	早期	77	砂止遺跡		117		
38	古津賀遺跡	前・後期	78	居徳遺跡群	後・晩期	118		
39	大宮・宮崎遺跡	早～後期	79	北高田遺跡	晩期	119		
40	曾我ノ西遺跡	後期	80	野田遺跡	後期	120		

斧が42点・石鏃が32点認められる。前者は撥形を呈する物が多く、岩質は殆どが頁岩である。これらは晩期土器に伴うものである。石鏃は前期の物は全てが大分姫島産黒曜石であるのに対して、後・晩期の物は頁岩・チャート・サヌカイトである⁴⁶⁾。

2・二ノ宮遺跡(図14-3)

宿毛市二ノ宮三山ヶ坂の、松田川下流域の右岸に形成された河成低位段丘³¹⁾上にあり、標高約15mで、河口からは5kmの地点である。橋上遺跡と類似した内容で、土器類は前期の轟B式土器、後期中葉、晩期前・中葉の物が見られるが、最多の遺物は後期中葉の中村I式土器で、深鉢の他に多くの黒色磨研浅鉢が見られる。石器は少量の打製石斧・石鏃などが認められる⁴⁶⁾。

3・宿毛貝塚(図14-4)

宿毛市宿毛字貝塚の宿毛湾奥部に臨む願成寺山が裾を広げる南麓傾斜面先端の小起伏地にあり、標高6m前後で前面の水田との比高差は4mで、現海岸線からの距離は約1kmである。これは1891年寺石正路氏によって発見された四国では数少ない貝塚であり、宿毛式土器の標識遺跡である。1957年国史跡となっている。ここでは1949・85年に発掘調査が実施された。中期初めの船元1・3式を少量含むが、主体は後期前葉の宿毛式土器である。宿毛式土器は精製深鉢・浅鉢・粗製深鉢から構成され、精製土器の文様は2条沈線を基調とする磨消縄文で、縄文の撚りはRLである。沈線の端部は入り組み文を有する。口縁部内面に稜線や段を持ち、沈線間にはRの短沈線を施すものが多いと見られる。研磨された器面に赤彩が施された優美な土器が目立つのもこの宿毛式土器の特徴である。この他に、後期中葉の平城式土器や片粕式土器・後葉の伊吹町式土器も出土している。

石器は石鏃・石錘・打製石斧・磨製石斧・砥石・块状耳飾りなどが出土している。石鏃は56点出土しており、岩質はサヌカイトが最も多くて、6割以上を占め、ついで、チャートや頁岩が見られるが、姫島産黒曜石は少ない。石錘は川原石の長軸端を打ち欠いたもので、砂岩・粘板岩製が多い。重さは約30g~250gまでのばらつきが認められる。打製石斧は撥形を呈して石材は頁岩、磨製石斧は蛇紋岩製・砂岩製が見られる。块状耳飾りは蛇紋岩製で、全体の約1/3を留めており、復元径は約5.7cmである。この他に、骨角器として鹿角製のヘアピン、イノシ骨を利用したヤスやベンケイ *Venericardia* 貝製の腕輪が出土している^{46) 50)}。

4・尻貝遺跡(図14-6)

幡多郡大月町周防形字尻貝山の入江奥部にあって、汀線から僅か20m程奥まった小高い台地の斜面上にあり、先端部の崖錐断面から遺物が露出している。1989年に小規模な発掘調査が実施された。出土土器は中期の船元Ⅲ式土器が極少量認められた他は、後期の平城I式・平城Ⅱ式・鐘崎式土器が出土している。特に、鐘崎式土器のまとまった出土は四国では初めての事例であった⁵¹⁾。

5・片粕遺跡(図14-7)

土佐清水市下川口字片粕にあり、片粕式土器の標識遺跡である。これは片粕港改修工事に際して発見されたが、本来は湾奥部の海岸線に接した標高9mの小規模な砂丘上に立地していたものである。1973年に小規模な発掘調査が実施され、後期を中心とした多量の土器と土坑が出土した。調査後にも工事で多量の土器が木村氏によって採集されている。土坑は楕円形のプランを有するものが4基検出され、埋土中より下益野式土器が出土している。これらは後期初めの土坑墓と考えられている。土器は後期前葉の下益野式・宿毛式・松ノ木式土器、中葉の鐘崎式土器と片粕式土器、後葉の伊吹町式土器などが見られる。最多の物は片粕式土器である。片粕式土器は縁帯文盛行期のもので、口縁部に直線文や波状文を巡らし、胴部には幾何学文様が施されて、口唇部には8の字状の粘土紐が貼付られているところに特徴がある。これらの有文土器に加えて、口縁部を肥厚させた胴部全縄文の深鉢が多量に伴うことも特徴である。石器は打製石斧5点・磨製石斧3点・大小の石錘21点の他に、岩偶と考えられるものが1点出土している^{46) 52)}。

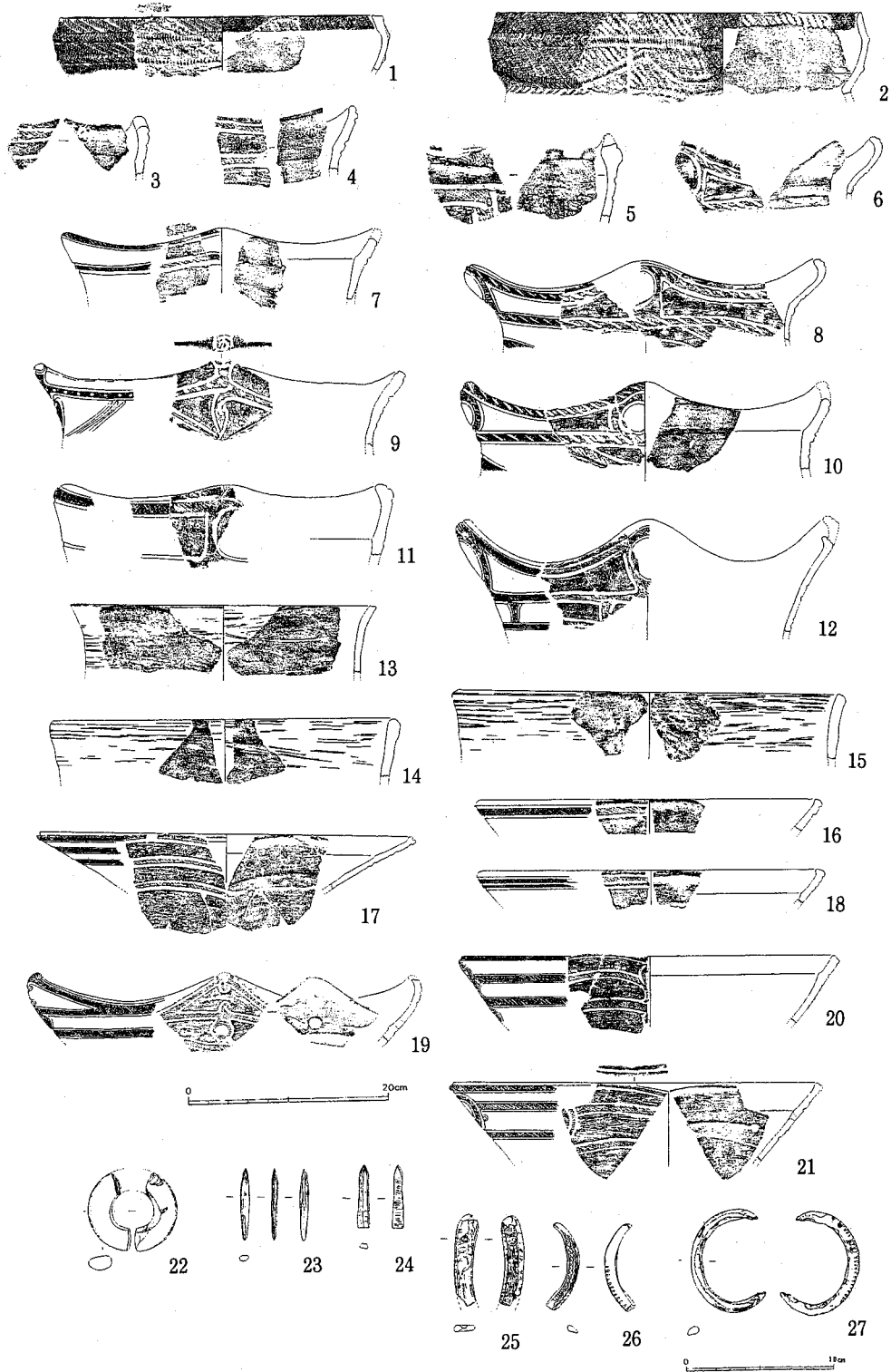


図15 宿毛貝塚出土遺物

1・2：中期土器（船元Ⅰ式），3～21：後期土器（宿毛式） 3～12：有文深鉢 3～15：粗製深鉢（有文浅鉢），16～21・22：玦状耳飾り 23・24：ヤス 25：コウガイ（鹿角製） 26・27：腕輪（ベンケイガイ，*Venericardia*）

6・唐人駄場遺跡(図14-11)

土佐清水市松尾唐人駄場の足摺半島先端部中央からやや西よりの海成中位段丘の足摺層^{6) 10) 14) 20) 22) 23)}上にあり、標高は約230mである。土器は前・中期の細片が数点確認されているに過ぎないが、石鏃が地元の住民及び木村氏によって100点以上採集されている。発掘調査は行われていないが、遺跡の立地や周辺の状況から、大規模な集落遺跡が存在していると考えられる。石鏃は木村氏の分類によると早・前期に属するものが80点、中後期のものが49点とされている。これらの岩質は、前者が姫島産黒曜石(80%)・チャート(10%)・サヌカイト(8.7%)・水晶(1.3%)で、後者は姫島産黒曜石(63.3%)・チャート(14.2%)・サヌカイト(12.2%)・水晶(6.1%)となっている。早期・前期には姫島産黒曜石が盛んに使用されていたことが分る。この他に、蛇紋岩製の玦状耳飾りが完形品で出土している⁴⁶⁾。

A-2) 四万十川流域の遺跡

この流域については、上・中・下の各流域を、A-2-1)・A-2-2)・A-2-3)と略記して述べる。なお、後者には狭長な中村平野も含むが、これは図9のような古土佐湾海進後の古中筋チャンネル形成後の環境の激変によるものである。

A-2-1) 上流域

1・北川遺跡(図14-20)

四万十川最上流域の東津野村北川字谷田にある。四万十川の支流北川右岸に形成された高位段丘の新田層²¹⁾上に立地し、標高は約380mであって、河川との比高差は15mである。1994年の調査で、長軸1.22mの楕円形プランをした後期の土坑が1基検出されている。包含層からは宿毛式土器・松ノ木式土器・平城式土器など後期前・中葉の土器が出土している。石器については、石鏃がそれまでの採集品も含めて40点程が確認されている。岩質はチャートが最多で半数以上を占め、サヌカイトが7点・姫島産黒曜石が2点である^{53) 54)}。

2・川口遺跡(図14-18)

高岡郡窪川町五十石の四万十川上流域の右岸に形成された扇状地に立地し、標高約200mを測る。工事中に偶然発見されたものであるが、後期前葉の松ノ木式土器のみが30数点出土している。この周辺には当該期の集落址が存在していたと考えられる⁵⁴⁾。

3・木屋ヶ内遺跡(図14-27)

幡多郡大正町木屋ヶ内の四万十川支流の櫛原川左岸に形成された高位段丘の先端部にあり、標高約160mである。圃場整備工事中に発見されたもので、1992年に小規模な発掘調査が実施された。包含層中から土器・石器が出土している。土器は細片のみであるが、条痕文土器や無文土器が、また、アカホヤ(音地Ⅱ)の下層からは大型楕円押形文土器が出土し、早期後半に属するものである。石器は石鏃102点・磨製石斧6点・打製石斧1点・楔形石器54点の他に、石錐・石匙などが出土した。石鏃の石材は7割以上を頁岩が占め、次に、サヌカイト・チャート・姫島産黒曜石の順である。磨製石斧の1点は長さ23.6cmの蛇紋岩製の両頭片刃の優良品である。いわゆる丸鑿形とはやや形態が異なっているが、背面は丸味を持ち、腹部は水平であって全体の形状が鰭節形を呈するもので、これは早期に属するものであろう。この種の石斧は四国島内では最初の出土であり、南九州との文化交流を示すものとして注目される⁵⁵⁾。

4・影野地遺跡(図14-23)

ここからは県下では数少ない前期土器が比較的まとまって出土している。九州の轟B式土器と瀬戸内の羽島下層式土器が出土しており、この時期に、この地が両文化の交接地であったことを示している。石器は石鏃が54点の他に、磨製石斧・石錐・石錘などが採集されている。石鏃はチャート

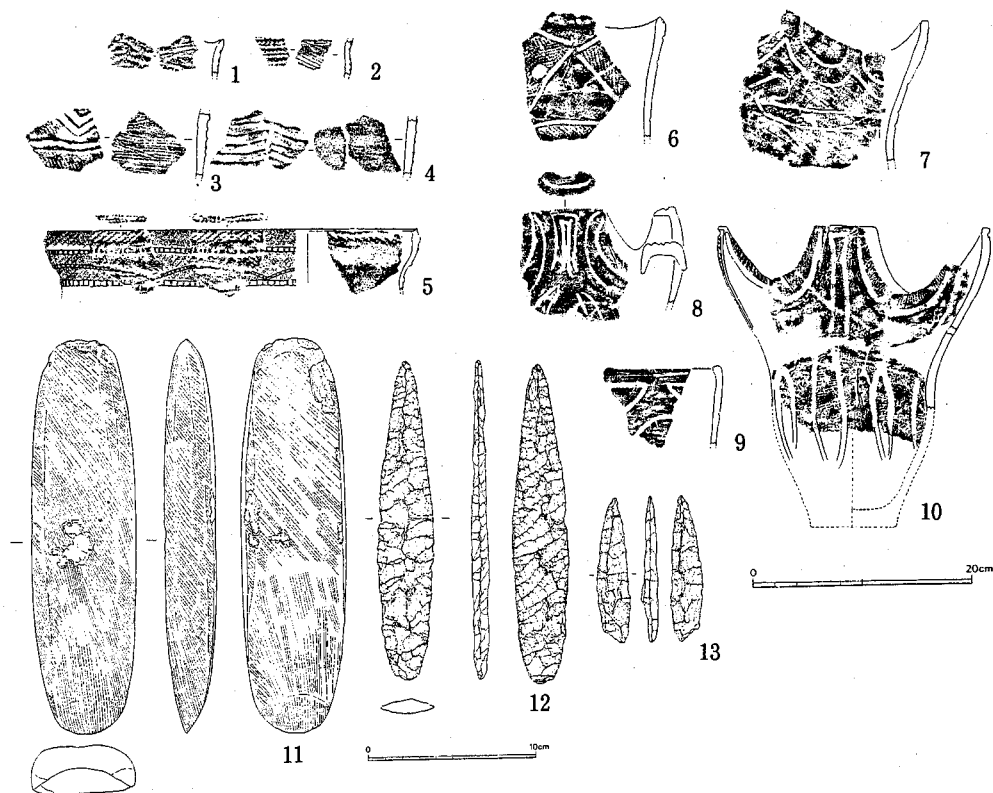


図16 川口ホリキ遺跡(1~10), 十川駄場崎遺跡(12・13)木屋ケ内遺跡(11)出土の遺物

1・2: 前期土器(羽島下層式), 3・4同(轟B式), 5: 同(彦崎Z2式), 8・9: 中期土器, 6・7・9: 後期土器, 11: 丸ノミ状石斧, 12・13: 尖頭器

が約8割を占め, 他に姫島産黒曜石とサヌカイトが見られる。また, 前期まで遡る石錘は当地域では稀有な例である⁵⁴⁾。

A-2-2) 中流域

5・十川駄場崎遺跡(図14-31)

幡多郡十和村十川駄場崎の四万十川本流に長沢川が合流する地点に, 舌状に張り出した河成中位段丘上にあつて標高は85mで, 河床との比高差は10mである。1982年以降, 5次にわたって調査が実施され, 草創期~後期の遺構・遺物が出土している。2層のアカホヤ(音地)層中より前期の羽島下層式土器が出土し, 3層からは繊維混入厚手無文が, 4層からは押型文土器が出土している。5・6層からは草創期の隆起線文土器と尖頭器が出土している。このことから, 2層は前期, 3・4層は早期, 5・6層は草創期として捉えることができよう。検出遺構は前期の集積炉が1基, 早期のそれが数基確認されている。尖頭器の1点は頁岩製で, 長さ19.2cmの柳葉型の完形品である。他の1点はサヌカイト製で, 約10cmの小型品である。一連の調査の中で石鏃は82点が出土しているが, 殆どが早期に属するものと考えられる。岩質は62点(76%)が珪質頁岩・チャートが12点(15%)の他に, サヌカイトと姫島産黒曜石製のものが少量ある^{56)~58)}。

6・川口ホリキ遺跡(図14-32)

幡多郡十和村川口梁瀬字ホリキの十川駄場崎遺跡とは長沢川を挟んだ対岸にある。1986・87年に

発掘調査が実施されて、土器は前期の森B式土器・彦崎Z2式土器・中期末と考えられる山形突起を持つ深鉢、及び、後期前葉の磨消縄文や沈線を施した深鉢、更に、後葉の広瀬上層式土器や伊吹町式土器が見られる。石器は石鏃が45点・石錘が46点の他に、石錐や石匙などが出土している。石鏃の石材は頁岩とチャートが多く、サヌカイトと姫島産黒曜石が少量見られる⁵⁹⁾。

7・広瀬遺跡(図14-34)

幡多郡十和村下広瀬字谷屋敷の四万十川右岸の河成高位段丘の大瀬層上にあって、標高は約70mで、河床との比高差は6mである。1963・71年に小規模な調査が実施された。後期中・後葉が主体の遺跡であるが、前期・中期の土器も少数出土している。後期中葉の土器は木村氏が三里式土器と呼称しているもので、鐘崎式土器に類似したものや胴部全縄文の土器が多く見られる。後葉の土器は片粕式を祖型とし、伊吹町式土器に移行する直前型式とされる広瀬上層式である。石器は石鏃が11点・石錐が3点・石錘が22点・块状耳飾りが1点出土している。石鏃の岩質は姫島産黒曜石が1点の他はチャートと粘板岩であり、块状耳飾りは粘板岩製である⁶⁰⁾。

8・大宮・宮崎遺跡(図14-39)

幡多郡西土佐村大宮・宮崎の四万十川の支流、目黒川の右岸の高位段丘大瀬層上にあり、標高は約122mである。この地区は西土佐村内で最も平野部が発達し、かつ、愛媛県との県境を接する地点にあるので、交通の要衝となっている。当遺跡の形成もこのような地理的条件と深く関わっている。遺跡は圃場整備に際して偶然発見されたもので、1996年には発掘調査が実施され、後期後葉を中心とする祭祀遺跡として注目されている。遺跡の初現は早期末の手向山式で、前期初頭の森B土器式と羽島下層式土器、中期初めの船元式土器も少数出土しているが、盛行期は後期後葉の片粕式・広瀬上層式・伊吹町式土器の段階である。祭祀遺構と考えられる配石遺構は19基検出されているが、その殆どは後期後葉に属するものである。配石遺構は形態から4タイプに分類されているが、最多のものは円環状を為すもので、拳大～人頭大の円礫を10個前後から最大65個を配している。円礫には目黒川上流に産出する花崗岩を意図的に使っている。遺物は土器の他に、石鏃・スクレイパー・石錘・打製石斧・石皿・石棒・線刻礫などが配石遺構の内外から出土している。遺物の中で注目を集めた線刻礫は、配石遺構の外から出土している。長軸6.35cm・短軸4.95cmの楕円形扁平砂岩礫を素材に、片面に女人像が線刻されている。後期後葉に属するものとすれば、全国的にも初めての出土である。これらの配石遺構群の広がり1000m²前後と考えられるが、隣接地には集落址に関係するような遺構は存在しない。故に、これは集落から離れた祭祀空間として捉えられる⁶⁰⁾。

A-2-3) 下流域及び中村平野

9・三里遺跡(図14-44)

中村市三里の四万十川左岸の自然堤防上にあって、標高は約16m、河口からの距離は約15kmである。1976年に小規模な調査がなされているが、出土遺物や周囲の状況から見て、後期前葉を中心とする大規模な集落遺跡と予想される。土器は中期後葉の船元3式土器と後期の宿毛式土器・片粕式土器などが少量出土しているが、主体を占めるのは縁帯文成立期の松ノ木式土器である。松ノ木式土器では内面施文や垂下条線を有する深鉢に伴って、粗製深鉢が多く出土している。石器は石鏃5点・打製石斧4点・磨製石斧1点・石錘72点などである。全体の遺物量に比べて、石鏃が少ないことに注目しなければならないが、生業のあり方とは恐らく無関係ではないであろう。植物遺体はドングリ・マテバシイ・クルミが確認されている^{54) 61)}。

10・中村貝塚(図14-47)

中村市山手通りの四万十川左岸の標高7.5mの自然堤防上にあって、河口からは約10kmの地点にある。これは縄文晩期の中村Ⅰ式・中村Ⅱ式土器の標識遺跡である。また、これは工事中に発見さ

れたもので、1965年に小規模な発掘調査がなされた。この正式な報告書は未刊であるが、調査に参加した木村氏の記録によると、地表下4.5mに厚さ20cmの第1貝層があり、更にその下位に厚さ60cmの層を挟んで第2貝層が40cmの層厚で堆積していたとされる。上層の第1貝層からは晩期後葉の中村Ⅱ式土器が、下層の第2貝層からは晩期中葉の中村Ⅰ式土器が出土しているが、量的には後者が圧倒的に多い。中村Ⅰ式土器は深鉢と浅鉢で構成される。深鉢は口縁部外面に1条の無刻突帯を持つのが特徴で、浅鉢は鱗状突起や口縁部内面に段と肥厚部を持ついわゆる黒色磨研土器である。中村Ⅱ式土器は刻目突帯を有する深鉢を特徴とする。

石器は石鏃・打製石斧・磨製石斧などの他に、注目すべきものとして磨製石剣と碧玉製の管玉がある。石剣は粘板岩製で先端部が欠落しているが、残存長14.3cmで柄部には沈線による文様が施されて、中村Ⅰ式土器に伴うものと考えられている。管玉は第1貝層出土であり、長さは1.3cmである。石鏃は27点出土しているが、石材は1点がチャートの他は全てサヌカイトである。打製石斧は7点が採集されており、撥形と短冊形がある。

貝塚を構成する貝類は、第2貝層はカキとハマグリが主体であるのに対して、第1貝層は淡水産のヤマトシジミが主体となっている。この変化は縄文海進後の海退による海岸線の後退によるものである。また、貝塚からイノシシ・ニホンジカ・タヌキ・イヌなどの獣骨やコナラ・イチイガシ・マテバシイ・モモなどの種子が出土している。更に、注目すべきは第2貝層からイネ花粉が検出されているが、これは当時としては画期的なことであった⁵⁴⁾。

11・入田遺跡（図14-48）

これは晩期終末の入田B式土器の標識遺跡であるが、次の2）弥生時代の節で述べる。

12・国見遺跡（図14-50）

中村市国見ダバの四万十川の支流中筋川、左岸にある低位段丘の鞭層相当層上にあって、標高は約7mである。1994年には発掘調査も実施されたが、木村氏の採集試料には中・後期土器片と石鏃43点や石錘・石錐なども含まれている。石鏃は約半数が姫島産黒曜石で占められていて注目される。発掘調査では縄文後期とされる土坑2基と縄文時代と考えられる集石遺構2基を検出し、中・後期の土器が出ている。中期土器が小片ながら比較的多く見られ、下流域での集落展開を知る上で重要な遺跡である^{54) 62)}。

13・ツグロ橋下遺跡（図14-52）

中村市有岡の中筋川中流域の左岸に伸びる舌状丘陵先端部の下段に広がる低湿地にあり、標高は約5.5mである。第3層から入田B式類似の有岡B式土器が、第4層からは中村Ⅰ・Ⅱ式土器が出土している。また、この第4層からは突帯の付かない深鉢も少し出土しているが、これらは中村Ⅰ式土器に先行する可能性がある。更に、黒色磨研土器も出土したが、多くは中村Ⅰ式に伴うものである。石器は石鏃6点・打製石斧11点・磨製石斧などが出土したが、石鏃の岩質は全てサヌカイトである。打製石斧は撥形が多い⁵⁴⁾。

14・船戸遺跡（図14-49）

中村市森沢船戸の中筋川下流域の低位段丘鞭層相当層上にあり、段丘面の標高は約6mである。中筋川と森沢川が南北からこの段丘を包み込むように流れ、この段丘の東側で合流している。縄文時代の遺物は段丘の南と西側の傾斜面から多量に出土している。また、段丘上面には古代・中世の遺構が検出されているが、縄文時代の遺構は全く見られなかった。段丘上には縄文集落が営まれていたと考えられるが、削剥によって消滅したものであろう。斜面からの遺物は集落経営の時に廃棄されたものと考えられる。土器は後期中葉から後葉の片粕式土器と伊吹町式土器が最も多く見られ、後期末と晩期前葉を欠き、中・後葉の中村Ⅰ・Ⅱ式土器が出土している⁶³⁾。

B) 中部の遺跡

B-1) 仁淀川・新莊川流域

1・不動ヶ岩屋洞穴遺跡(図14-75)

高岡郡佐川町西山の聖嶽山腹にあり、洞穴の下には仁淀川支流の尾川が流れており、河床との比高差は約40mである。洞口は南に面しており、高さ6mの逆U字形をした石灰岩洞穴で、テラスはない(表3)²⁴⁾。1964・67年の調査により、現在は国史跡となっている。層序的な前後関係を明確にはできないが、草創期～早期の遺物が出土した。草創期の遺物は細隆起線文土器・押圧縄文土器・条痕文土器・有舌尖頭器や局部磨製石斧がある。これらの細隆起線文土器と有舌尖頭器のセットは不動ヶ岩屋Ⅰ式文化と呼ばれ、愛媛県の上黒岩岩陰遺跡第9層との共通性が指摘されている。この他に、局部磨製石斧もこの文化層に伴う可能性がある。早期は押型文土器と厚手無文土器が見られ、瀬戸内の黄島式土器併行期に求めている。石器は石鏃や石錐・スクレイパーなどが出土しており、石錐には姫島産黒曜石製のものが見られる。

この他に、シカの歯を利用した骨鏃やイノシシの下顎を利用した骨製尖頭器が、装飾品としては、タカラガイ・イモガイの垂飾品が出土している。イノシシ・シカ・ウサギ・アナグマ・ツキノワグマなどの獣骨、貝類ではサザエ・カワニナ・ハイガイ・ヤマトシジミ・カキなどが出土している⁶⁴⁾。

2・城ノ台洞穴遺跡(図14-73)

これも高岡郡佐川町虎杖野川の坂の柳瀬川左岸の城ノ台と呼ばれる小山丘の中腹に開口した石灰岩洞穴である。1941年に長谷部言人氏等によって調査されている。ここからは城ノ台式土器と命名されている早期後半の押形文土器と石鏃・叩石が出土している⁶⁴⁾。また、熟年男性1体分の人骨やオオカミ・イヌ・タヌキ・アナグマ・イノシシなどの骨も出土した。特に、このオオカミは貝塚出土のものよりも古い特徴を残しているとされ、「佐川狼」と記録されている。

この他に、仁淀川中流域には草創期・早期の遺物を産出した黒岩坂東遺跡・中ノ芝遺跡・横畠清水遺跡などが知られている⁵⁰⁾。

3・倉岡遺跡(図14-81)

土佐市波介倉岡の波介川右岸の小残丘の東斜面に立地し、標高は約10mである。これは縄文晩期を主体とするが、中期末～後期、及び、弥生土器も出土した。これは僅少な晩期土器のB)の貴重な資料である。この晩期土器については、刻目突帯を持たない深鉢と黒色磨研浅鉢の一群を倉岡Ⅰ式に、口縁部下に一条の刻目突帯を有するものを倉岡Ⅱ式土器として、編年がなされている⁶⁵⁾。

4・居徳遺跡群(図14-78)

土佐市高岡居徳の高岡平野北部にあり、高岡市街地上の自然堤防によって閉塞された後背湿地に立地し、標高は約8mである。この後背湿地中には、埋没残丘が随所に残っているが、1997・98年の調査で、その斜面部から縄文時代を中心とする遺物の堆積層が形成されていることが明らかとなった。調査区南部の1区からは、晩期末・弥生前期土器が混在して出土し、北部の4区からは後期中葉～晩期の土器が多量出土している。また、4区中央部の埋没旧流路からは、晩期中葉に伴うものと考えられる鋳2点と漆製品が出土した。これらの斜面堆積遺物は、地表下約2～3mに達している⁶⁶⁾。

5・北高田遺跡(図14-79)

土佐市高岡町乙北高田及び西山の高岡町市街地西方1.3km付近に展開しており、通称西山と呼ばれる残丘の西裾部及び低湿地に埋没している微高地に立地していて、現地表の標高は約6mである。1998年の調査で、微高地上から後述する弥生後期の集落址が、山丘斜面からは縄文晩期土器・石器が多量に出土した。後者の晩期土器は晩期中葉の倉岡Ⅰ式や、土器の深鉢と黒色磨研浅鉢を主体とし、少量の刻目突帯文土器が出土した。石器は磨製石斧9点・打製石斧2点・石錐6点・叩石・砥

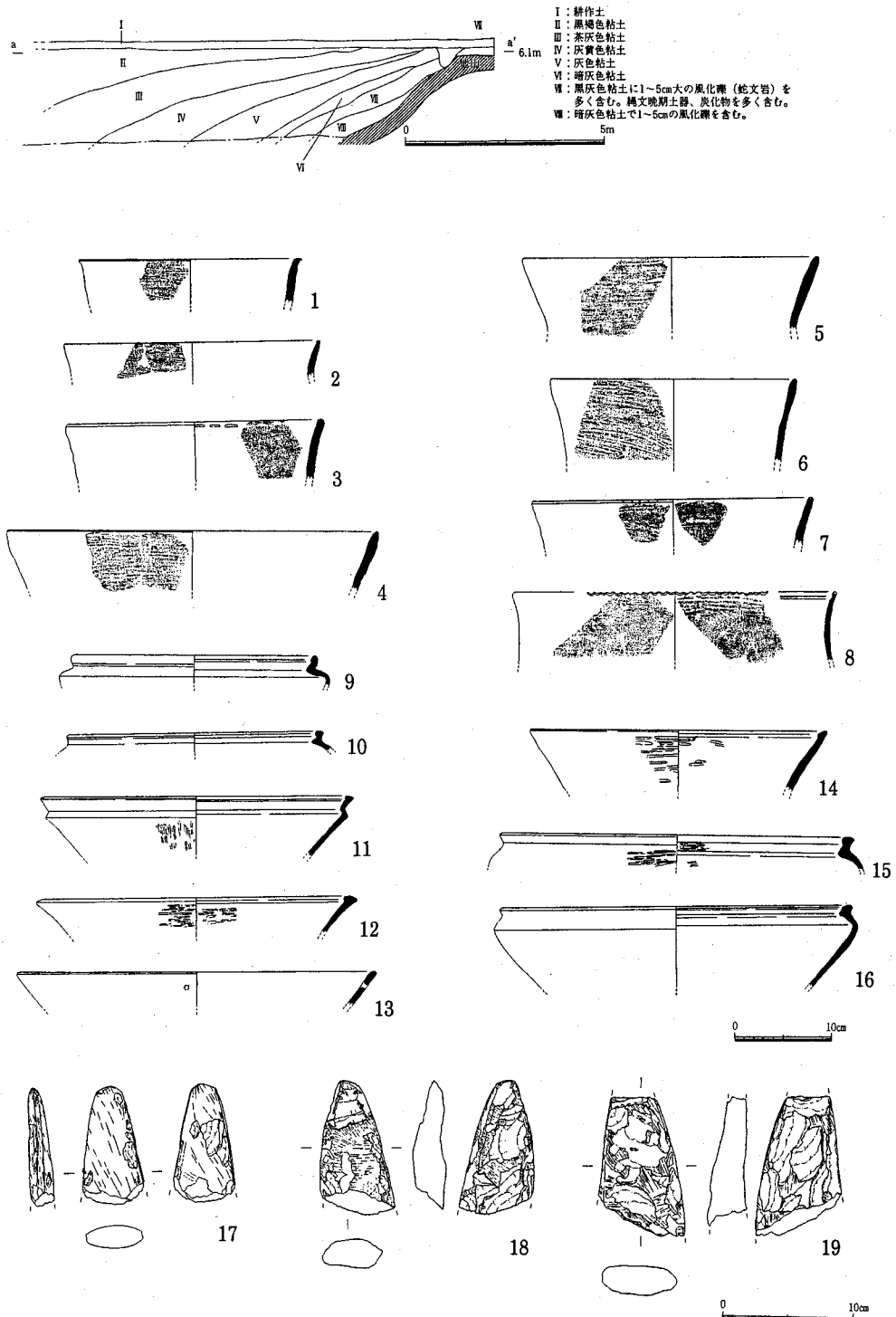


図17 北高田遺跡出土の縄文晩期の遺物
 1~8: 深針 9~16: 浅針 17~19: 磨製石器

石が出土しており、磨製石斧は7点が蛇紋岩製である。これらの遺物は丘陵上にあつたと考えられる集落址から廃棄されたものである。倉岡遺跡で提唱された倉岡Ⅰ式土器の実態を明らかにできたことも成果の一つである⁶⁷⁾。

6・西分増井遺跡(図14-85)

吾川郡春野町西分の新川川左岸に形成された自然堤防上に立地し、標高は約3.8mである。1989年の調査で、縄文後期・弥生時代の集落址が検出された。縄文時代の遺構は長軸1～2mの楕円形の浅い土坑で、9基検出した。土器は後期中葉の片粕式土器を中心に、後葉の広瀬上層式土器などが出土した。検出遺構も当該期に属するものであろう。石器は石鏃29点・磨製石斧2点・打製石斧3点・石錘5点・石棒1点などである。石鏃の岩質はサヌカイトが22点・チャートが7点・磨製石斧は安山岩・凝灰岩で、打製石斧は全てチャート、石錘はチャート・砂岩・流紋岩であり、石棒は結晶片岩である。打製石斧は全て分銅形で、石錘は礫石錘であつて、長軸の両端を打ち欠いたものである⁶⁸⁾。

7・永野遺跡(図14-59)

高岡郡葉山村永野西ノ切レの新莊川中流域の左岸に発達した河成中位段丘上に立地し、標高は約69mである。ここでは1977年と1983年に、小規模な調査が行われた。中央部では出土例の少ない前期の彦崎Z1・Z2式、中期初めの船元式、後期前葉の下益野式や松ノ木式、後葉の彦崎KⅡ式や伊吹町式土器などが出土している。石器は77年の調査で、石鏃71点・石錐2点・石錘12点・磨製石斧2点が出土した。石鏃の岩質はサヌカイト42点・チャート26点・姫島産黒曜石2点・粘板岩1点である。姫島産黒曜石製の2点は早～前期に時期同定されている。当遺跡は出土土器の時期幅から見て、拠点的な大規模集落である可能性が高い⁶⁹⁾。

8・姫野々上町遺跡(図14-60)

葉山村姫野々車床に所在し、永野遺跡の下流約1kmにある。新莊川左岸の河成中位段丘上に立地し、標高は約60mである。1982年に小規模な調査が実施されて、県下では極めて僅少な晩期前葉の土器が比較的まとまって出土し、しかも、当該期の竪穴住居が1棟検出されている。竪穴住居は全体の半分程度の検出であるが、1辺約3mの隅丸方形プランを有するものである。晩期の住居としては県内唯一の例である⁷⁰⁾。

B-2) 物部川流域と香長(高知)平野中央部

1・奥谷南遺跡(図14-90)

前述のように、ここでは旧石器時代～縄文時代を中心とする遺物が層序ごとに出土している。草創期に属する遺構は岩陰南斜面テラスにおいて、長軸2.5mの楕円形の竪穴状遺構を検出しており、埋土中より隆起線文土器・隆帯文土器・細石刃などが出土している。これらの土器は鹿児島県の掃除山遺跡や椿ノ原遺跡などの南九州で注目を集めている土器群に属するものであり、四国での出土は当遺跡が唯一の例である。草創期の石器は槍先形尖頭器・神子柴形局部磨製石斧・有溝砥石などである。槍先形尖頭器は20本出土しており、その内12本がサヌカイト、8本がチャートである。前述のように、旧石器時代にはサヌカイトは認められていないことから、これの本格的な流入が草創期から開始されたことを示すものである。この他に、早期～後期の土器も出土しており、早期の土器には南九州の平袴式土器、前期は瀬戸内の羽島下層式や彦崎Z2式土器などが認められる⁴⁹⁾。

2・栄エ田遺跡(図14-91)

南国市岡豊町の奥谷南遺跡の北400mにある。奥谷南遺跡と同様に、扇状地形の奥部に立地し、標高は約11mである。1993年に調査がなされており、包含層からは後期から晩期の遺物が出土している。後期土器は片粕式土器や伊吹町式土器が見られ、晩期は後葉の刻目突帯文土器を主体とする

が、中葉に属するものも見られる。石器では蛇紋岩製の磨製石斧が大量に出土している⁷¹⁾。

3・田村遺跡群（図14-92）

南国市田村に所在し、1980年～83年、96年～2000年にかけて大規模な発掘調査が実施されており、縄文後期から近世の大集落址であることが判明している。遺跡は物部川右岸に形成された自然堤防上に立地しており、30万㎡以上の広がりをもっている。標高は6～8mで、海岸線からの距離は約3kmである。縄文時代の遺物は遺跡中で、3地点から後期中葉と後葉の土器・石器が集中的に出土している。これらは殆どが包含層出土であるが、中葉の土器は片粕式土器と鐘崎式土器である。特に後者については九州以外の場所でのまとまった出土例は今回が初めてのことであり、これらの交流を考える上で注目される。石器は1980～83年の調査で、打製石斧が50点・磨製石斧が4点・石錘が22点・石鏃が7点出土している。打製石斧の形態は分銅形・撥形・短冊形が見られ、石材は殆どが物部川から供給された転石の白亜系泥質砂岩である。石錘は扁平楕円状でディスク形の河原石の両端を打ち欠いたもので、重量は40～300gとばらつきがある。石鏃は全てサヌカイト製であるが、他の石器に比して出土量が少ない。

後述のように、当遺跡からは弥生時代の水田址が検出されているが、縄文後期の層準からもイネとソバの花粉が検出されている。特に、後者は長期にわたって連続して出現している。花粉分析を行った山中三男氏は、「縄文後期～弥生時代前期にかけて、イネとソバが同一場所で栽培されていた」と述べている。多量の打製石斧はイネやソバの栽培に使用されたものであろう^{72) 73)}。

4・林田シタノヂ遺跡（図14-94）

香美郡土佐山田町林田の物部川左岸に形成された低位段丘の土佐山田層上に立地し、標高は約58mである。1992年の調査で、縄文時代中期末～後期初頭・晩期の遺構・遺物が確認された。中期末～後期の遺構は89×64cm深さ47cmの楕円形の小土坑である。土坑の性格は不明であるが、埋土中層から、上胴部に区画文を配した深鉢が2個体出土した。晩期は円形の小土坑が検出されて、晩期中葉と考えられる深鉢と浅鉢が埋土中から出土した⁷⁴⁾。

5・美良布遺跡（図14-96）

香美郡香北町美良布ヘイの物部川中流左岸の低位段丘の美良布層¹⁵⁾上にあり、標高は約120mである。1969年と90年に調査が実施されており、69年の調査で出土した晩期中葉の土器について、岡本氏は美良布式土器と命名した。90年の調査では、当該期のピットと土坑が検出され、埋土中より美良布式土器の深鉢・浅鉢が出土している。また、極少量ながら、薦島式土器と考えられる早期の無文土器が出土している^{75) 76)}。

B-3) 吉野川流域の遺跡

1・飼古屋岩陰遺跡（図14-97）

香美郡土佐山田町繁藤飼古屋の吉野川支流、穴内川の上流域にあり、急峻な谷の下方に開口したチャート巨岩の岩陰であって、標高は350～360mである。1982年に調査が行なわれており、早期の遺物を主体として中・後期の遺物が少量出土している。早期の土器は神宮寺式に比定できるネガティブな押型文と、これに後出する黄島式併行の山形文や楕円形の押型文土器が出土している。石器は石鏃が327点出土しており、殆どが早期に属するものと考えられる。石材の岩質は70%がサヌカイトで、姫島産黒曜石が2点、他はチャートである⁷⁷⁾。

2・松ノ木遺跡（図14-18-98）

長岡郡那山町寺家落合、松ノ木の吉野川本流に汗見川が合流して、流向が東北方向に大きく転じた所に、舌状に張り出した低位段丘の大瀬層の南端部に立地し、標高は約250mである。1990年から5次にわたる発掘調査が行われ、松ノ木式土器の型式設定を始め、多数の成果を納めて注目され

ている。土器は縁帯文成立期の松ノ木式土器が多いが、前期～晩期まで出土していて長期にわたって営まれた拠点集落として位置付けることができる。これは松ノ木遺跡が吉野川上流域にあって最も発達した河成中位段丘の大奈路層上にあることと、太平洋岸と瀬戸内との丁度中間地点に位置することから、南北交流の要衝としての役割を果たしていたからに他ならない。

松ノ木式土器は1次・5次調査において大量に出土しているが、その多くは段丘斜面の谷状の落ち込みから廃棄された状態で検出された。器種組成は有文深鉢・粗製深鉢・有文浅鉢・無文浅鉢・双耳壺などから成っている。有文深鉢は内面施文を特徴とし先行型式の宿毛式土器と福田K2式土器の両者の特徴を有している。有文浅鉢は深鉢とは全く異なった文様構成を持ち、かつ、バリエーションが豊富である。先行型式に比べると、浅鉢の比率が多いことも特筆すべきものである。また、粗製深鉢が定量出土するのも本型式からである。本型式は四国島内はもとより、鹿児島・宮崎・佐賀・島根など西日本各地から出土例が知られるようになった。

石器は石鏃・磨製石斧・石錘・石包丁状石器・石匙・玦状耳飾などが出土している。石包丁状石器は5点出土しており、全てサヌカイト製で、両端もしくは片側の端部に抉りを持つもので、雑穀類の穂摘み具と考えられる。石錘は1～4次調査までに108点も出土している。結晶片岩や御荷鉢緑色岩の河原石の両端を打ち欠いたもので、重さは100g未満のものが殆どである。玦状耳飾りは2点出土している。2点とも欠損品であるが、1点は泥質片岩、他の1点は滑石製であって小孔が穿たれている。

遺構は少ないが、宿毛式段階の竪穴住居1棟と松ノ木式段階の土坑が数基検出されている。竪穴住居は直径3m足らずの小型であるが、後期の住居としては本県で唯一の例である。この他に、自然遺物としてイノシシ・シカ・マダいの骨片が出土しており、土器胎土からはイネのプラントオパールも検出されている。松ノ木式土器は成立期の縁帯文土器のみならず、後期土器全体の中で、構造的な変革をもたらした大きな画期として位置付けることができよう。これは石包丁状石器やイネのプラントオパールにも見られるように、生業の変化に照応した現象として理解することができよう^{78)～81)}。

3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は県下で400例余りが確認されているが、ここではA)西部については一括して述べ、B)中部ではB-1)物部川流域・B-2)仁淀川流域・B-3)吉野川流域に分けて述べることにする。なお、C)にはあまりみられない。

さて、その分布はB)に多く見られ、A)には少なく、縄文時代とは逆の傾向を示している。特に、土佐市から南国市を中心とした香長平野付近に密集しており、縄文時代に盛行したA)の四万十川中・上流域や海成中位段丘上には全くと言ってよいほど、分布が認められない(図19)。これらの分布の相違についての原因の解明は実に興味深いものがある。

かつて、南四国の弥生文化は九州に近いA)で最も早く成立し、次第にB)方面へ伝播したと理解されていた。しかし、中央部の田村遺跡の近年の発掘調査の進展により、それとは逆に、B)の中部瀬戸内からまず香長平野に伝わり、ここから東西に伝播したことが明らかとなった⁸²⁾。また、B)でもB-1)仁淀川流域とB-2)物部川流域とでは、土器の特徴に大きな相違があることが明らかになり、より細かな地域の特性が明確になりつつある。たとえば、田村遺跡では最古の弥生土器が純粋な状態で展開しているのに対して、A)の入田遺跡やB-1)の居徳遺跡などでは晩期土器と共存する二重構造をとっている。土器型式におけるこの種の二重構造は、周辺現象として理解すべきものである⁸³⁾。また、田村遺跡では前期の初期の段階からいわゆる大陸系磨製石器が全てそろっているのに対して、A)ではこれらは前期を通じて見られないのである⁸⁴⁾。

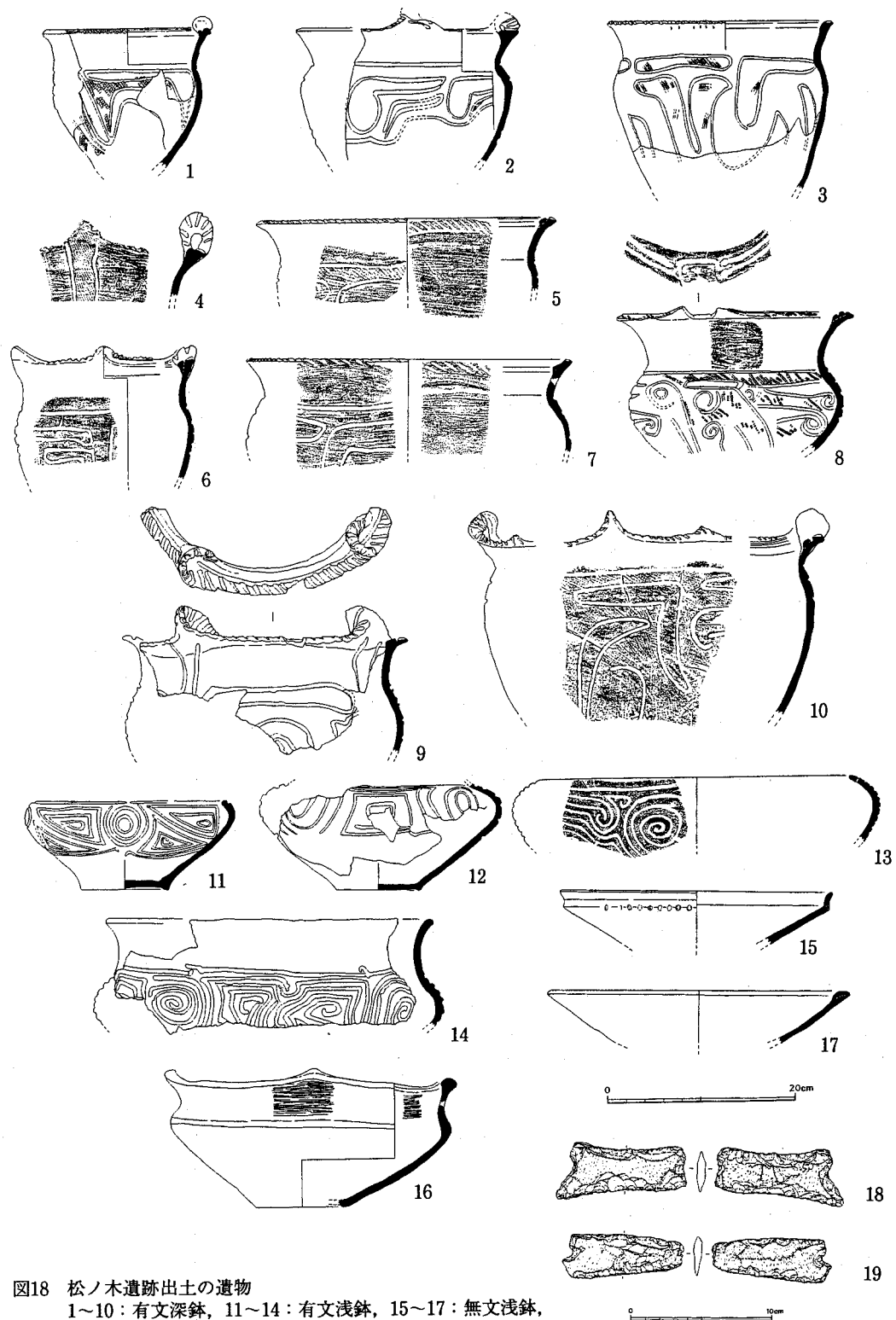


図18 松ノ木遺跡出土の遺物
 1~10: 有文深鉢, 11~14: 有文浅鉢, 15~17: 無文浅鉢,
 18・19: 石包丁状石器

更に、弥生文化成立期の遺跡として、田村遺跡が最も注目されるが、これは安定した自然堤防の形成と共に、潟湖(これを土佐潟湖 Tosa Lagoon と定義した¹⁰⁶⁾)に臨む津 Ford としての機能を当初から有していたことが遺跡立地の前提にあったものと考えられる。前期前・中葉の遺跡は、B-3)の吉野川流域を除けば、B)の香長平野を始めとする沖積平野に分布するが、その数は少ない。しかし、前期初頭に出現した松菊里型住居を含む集落は香長(高知)平野と朝鮮半島の関係を知る上で注目すべきものである。また、前期末葉になると、B-1)仁淀川流域とB-2)物部川流域などの上・中流域を始め、全県下的に分布が認められるようになる。前期末に成立した遺跡は中期中葉まで継続するが、それ以降は消滅する場合が多い。中期後葉から後期前葉に至ると、新たな画期を迎える。すなわち、田村遺跡が最大規模の拠点集落に成長すると共に、遺跡数が飛躍的に増加する。平野部の遺跡に加えて、いわゆる高地性集落や丘陵上の集落、あるいは、龍河洞洞穴遺跡²⁴⁾のように、洞穴内に遺跡が営まれるのもこの時期の特徴である。また、B-1)仁淀川下流域の高岡平野の低湿地中に安定した微高地が形成され、集落が出現するのも後期前葉である。

この時期の文化現象として注目されることは、B)の香長平野では凹線文土器や瀬戸内系の甕が盛行するのに対して、B-1)仁淀川流域以西の地域では櫛描文土器と土佐型甕が多用されることなどに示されるように、東西で異なった土器文化圏が形成されることである。このことと、青銅祭器に見られる東西の相違、すなわち、銅鐸と銅矛の分布の相違とは、恐らく無関係ではなかったであろう。

ともあれ、中期末から後期前・中葉は、南四国における弥生文化の最盛期として捉えることができる。そして、その中心は田村遺跡であり、南四国のみならず、広く西南日本外帯に開けた拠点集落として位置づけることができる⁸⁵⁾。しかしながら、後期後葉から末に至ると、田村遺跡や下ノ坪遺跡などそれまでの集落遺跡が急速に解体して終焉を迎えるのである。その後の遺跡は、これまであまり分布がみられなかった長岡台地などの浸食段丘上に展開するようになり、遺跡数は爆発的に増加する。伝統的集落との断絶や新集落の急増は、竪穴住居の形態や土器様式の変化を伴っており、まさに、構造的変化として位置づけなければならない。劇的とも言うべきこの変化は、古墳時代出現前夜という激動期における南四国の状況を示すものである⁸⁶⁾。

A) 西部地域

1・入田遺跡(図19-119)

中村市入田佐田ヶ原の四万十川右岸の自然堤防上に立地し、標高は約13mであるが、現在は堤防の外側に位置している。1951年に弥生式文化総合研究特別委員会によって発掘調査が行われて、考古学史上著名な遺跡である。地表下3.5m~4mに形成された遺物包含層から、晩期終末の入田B式土器と共に、遠賀川式土器(入田I式土器)が出土した。入田B式土器は2条の刻目突帯を有する深鉢を特徴とし、少量の壺と浅鉢が見られる。入田I式土器は四国で最古の弥生土器として位置付けられ、A)西部から東に向かって弥生文化が伝播した根拠とされてきたのである。しかし、最近では、田村遺跡出土の遠賀川式土器の中に、入田I式土器よりも形式的に古い土器の存在することが明らかとなった。従って、従来の知見とは逆に、香長平野から西部に向かって弥生文化が伝播して行ったと理解しなければならない。入田遺跡からは62点もの打製石斧が出土しているが、約8割が撥形で占められていて、短冊形が一般的であった先行時期とは形態に大きな相違が認められる。また、打製石包丁も出土しているが、石鏃は見られない。このような石器組成は生業の変化を示すものとして興味深い^{54) 87)}。

2・国見遺跡(図19-120)

前述した国見遺跡からも前期中葉の土器が、竪穴状の落ち込みから比較的まとまって出土してい

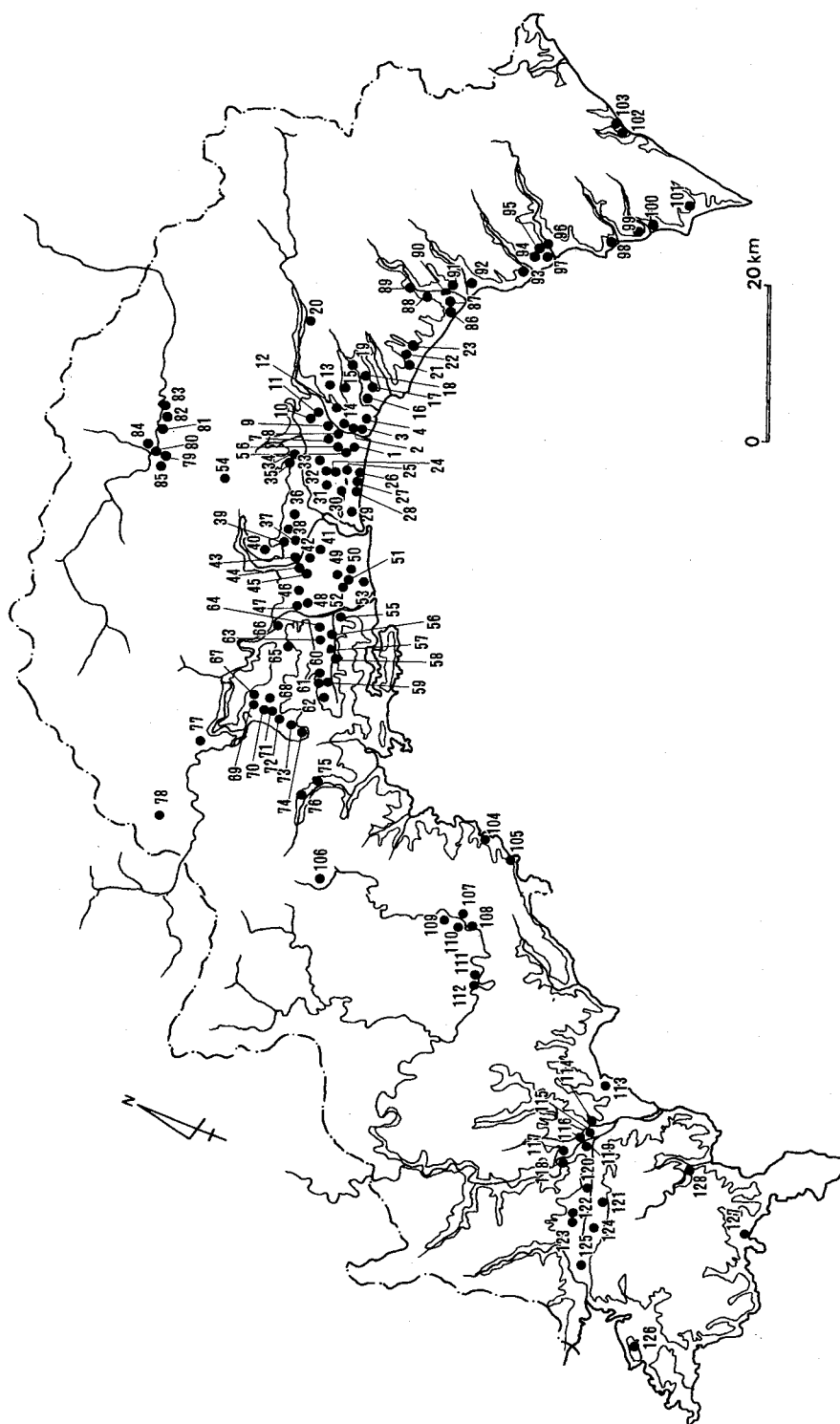


図19 弥生時代遺跡分布図
数字は表6参照

表6 高知県下の主要な弥生時代遺跡一覧表

NO	遺跡名	時期	NO	遺跡名	時期	NO	遺跡名	時期
1	田村遺跡	前～後期	44	赤鬼遺跡	後期	87	ジヨウマン遺跡	
2	下ノ坪遺跡	後期	45	朝倉遺跡	中期	88	清近岡遺跡	中・後期
3	上岡遺跡	前～後期	46	坂口遺跡		89	宮ノ上遺跡	
4	野口遺跡	後期	47	寺門遺跡	後期	90	シガ屋敷遺跡	
5	平杭遺跡	"	48	バーガ森北斜面遺跡	中・後期	91	清水寺岡遺跡	中・後期
6	表中内遺跡	"	49	大用遺跡	後期	92	岡遺跡	
7	金地遺跡	"	50	西分増井遺跡	前・後期	93	安田八幡宮遺跡	前期
8	岩村遺跡	前・後期	51	馬場末遺跡	後期	94	ホウゼンジ谷遺跡	
9	原遺跡	中・後期	52	山根遺跡	前期	95	岡地遺跡	
10	ひびのき遺跡	後期	53	仁ノ遺跡	"	96	土生岡遺跡	
11	稲荷前遺跡	中期	54	初平ヶ岩屋洞窟遺跡	中期	97	立町遺跡	
12	林田遺跡	後期	55	用石遺跡	中・後期	98	戎町遺跡	
13	龍河洞洞穴遺跡	中・後期	56	本町遺跡	後期	99	正毛遺跡	
14	深淵遺跡	後期	57	北高田遺跡	"	100	コヤガ谷遺跡	
15	本村遺跡	中・後期	58	倉岡遺跡	"	101	下里遺跡	
16	下分遠崎遺跡	前・中期	59	江良澤遺跡	"	102	野根遺跡	
17	十万遺跡	後期	60	入沢遺跡	"	103	ゴセン遺跡	
18	拝原遺跡	前・後期	61	森光遺跡	"	104	志和遺跡	
19	幅山遺跡	後期	62	徳安遺跡	"	105	大鶴津遺跡	後期
20	美良布遺跡	前～後期	63	居徳遺跡群	前・後期	106	奈路遺跡	
21	北屋敷遺跡		64	野田遺跡	"	107	カマガ遺跡	
22	西分遺跡		65	本郷遺跡	後期	108	神の西遺跡	後期
23	清水遺跡		66	波川北遺跡	"	109	西川角遺跡	"
24	大篠遺跡	前期	67	假又遺跡		110	宮内遺跡	"
25	里改田遺跡	後期	68	長野遺跡		111	川口遺跡	"
26	中屋敷遺跡	"	69	佐川高校校庭遺跡		112	越の下遺跡	
27	岩坂遺跡		70	岡崎遺跡		113	早咲遺跡	後期
28	上栗山遺跡	後期	71	岩井口遺跡	後期	114	佐岡遺跡	"
29	三里中学校遺跡		72	塚谷遺跡		115	岩崎山遺跡	"
30	介良遺跡	前期・後期	73	二ノ部遺跡	後期	116	吹越山遺跡	"
31	小籠遺跡	"	74	椎木谷遺跡		117	池本遺跡	
32	東崎遺跡	後期	75	姫野野遺跡		118	島の宮遺跡	
33	三島遺跡	中・後期	76	長野遺跡		119	入田遺跡	前期
34	栄工田遺跡	前・後期	77	清水遺跡		120	国見遺跡	"
35	奥谷南遺跡	後期	78	坂本太平遺跡	前期	121	西ノ谷遺跡	"
36	秦泉寺北遺跡	"	79	下毛田遺跡		122	芳奈遺跡	後期
37	かろうーと遺跡		80	大畑遺跡		123	芳奈向山遺跡	"
38	初月遺跡		81	銀杏ノ木遺跡	前・後期	124	森遺跡	
39	福井遺跡	中・後期	82	天神前遺跡	後期	125	福良遺跡	
40	舟ヶ谷遺跡	後期	83	永田遺跡	"	126	ムクリ山遺跡	
41	神田遺跡	"	84	松ノ木遺跡	前～後期	127	田ノ内遺跡	
42	柳田遺跡	前・中期	85	高笹遺跡	後期	128	五味遺跡	
43	上本宮町遺跡	後期	86	黒島遺跡	"	129		

る。壺は遠賀川式土器としての特徴をもっているが、甕は型式としては未確立物が多い⁶²⁾。

3・西ノ谷遺跡(図19-121)

中村市江ノ村西ノ谷の中筋川右岸の低湿地に開口する谷平野に立地し、標高は約7mである。これは前期末の遺跡で、2基の土坑と1条の溝を検出している。遺構検出面は地表下2.5mの所であり、厚い粘土層・腐植土層に覆われている。各遺構及び遺構検出面からは一括性の高い前期末の土器が多数出土しており、A)西部の土器編年を組む上で重要な基準資料となっている。これらの土器の中には、香長(高知)平野では見られない九州豊後地方との共通性を有する土器もまとまって出土しており、地域性を示すものとして注目される。また、土器の9割以上を甕が占めるなど組成においても大きな特徴が認められる。石器も大陸系磨製石器が全く見られないなど、香長(高知)平野とはその様相を大きく異にしている。これらの相違は、弥生文化の成立が両地域間で大きく異なっていることを示すもので注目すべき現象である⁸³⁾。

B) 中央部

B-1) 物部川流域

1・田村遺跡(図19-1, 20, 21)

物部川右岸に形成された自然堤防上に立地する前期初頭から後期に至る集落址である。ここでは2度にわたる大規模調査が実施された結果、総面積20万㎡以上、竪穴住居は400棟以上を擁する西日本屈指の拠点集落であることが明らかとなった。この遺跡が形成される頃には、この前面には前述した閉塞性の土佐潟湖が発達し、物部川は幾筋もの流路となってこの土佐潟に注ぎ込んでいた(図8)。前期初頭の集落は潟湖に臨んだ最南端の地点にあり、標高は約6mである。ここからは、松菊里型住居を含む竪穴住居10棟・掘立柱建物15棟などから構成される大規模な集落が検出されており、弥生文化成立期の集落の具体像を示すものとしては他に例をみないものである。前期前・中葉になると、より高い北方の自然堤防に移動して、環濠を巡らしている。環濠の中には貯蔵穴と考えられる土坑が数多く存在し、竪穴住居は環濠の外に営まれている。中期前半ではその集落規模は縮小するが、この間に、前期に存在した自然流路が洪水で氾濫した砂礫で埋没し、より広い安定した生活空間が形成される。中期末から後期に至ると、集落規模が飛躍的に拡大し、拠点集落としての様相を整えるようになる。後期前半には最盛期を迎え、竪穴住居や掘立柱建物の他に、巨大な柱を持った望楼も出現するようになる。田村遺跡からは現在400棟以上の竪穴住居と200棟近い掘立柱建物が検出されているが、その大半が中期末～後期前半に属するものである。また、この時期には、高松平野からの搬入土器や東・南九州系の土器が出土している。このような展開は、当地が黒潮ルートと中部瀬戸内との交流の要衝として重要な役割を果し、南四国のみならず西日本外帯に開けた拠点集落であったことを示している。しかし、後期中葉のうちに集落内に掘り巡らされた溝は全て埋没し、集落は急激に衰退して、やがて消滅する。これは古墳時代社会の出現という新たな政治的社会的形成のと深く関わっているのであろう^{89) 91)}。

2・下ノ坪遺跡(図19-2)

香美郡野市町上岡下ノ坪の物部川左岸の沖積低地にあつて、標高13m前後で、河口からの距離は約3kmである。1994～96年にかけて調査され、後期前半を中心とする集落遺跡であることが明らかとなった。遺跡の初現は前期末に遡るが、竪穴住居が営まれて本格的な集落としての様相を整え始めるのは後期からである。竪穴住居は後期前・中葉に属するものが15棟確認されているが、遺跡の規模からすれば、70棟前後を擁する集落を想定することができる。住居址の中には、直径11mを越える大型のものもあり、80個のガラス玉や鉄鏃・ヤリガンナなどの鉄製品も多く出土している。遺



図20 田村遺跡群の集落分布 (1985~88年の調査成果より)

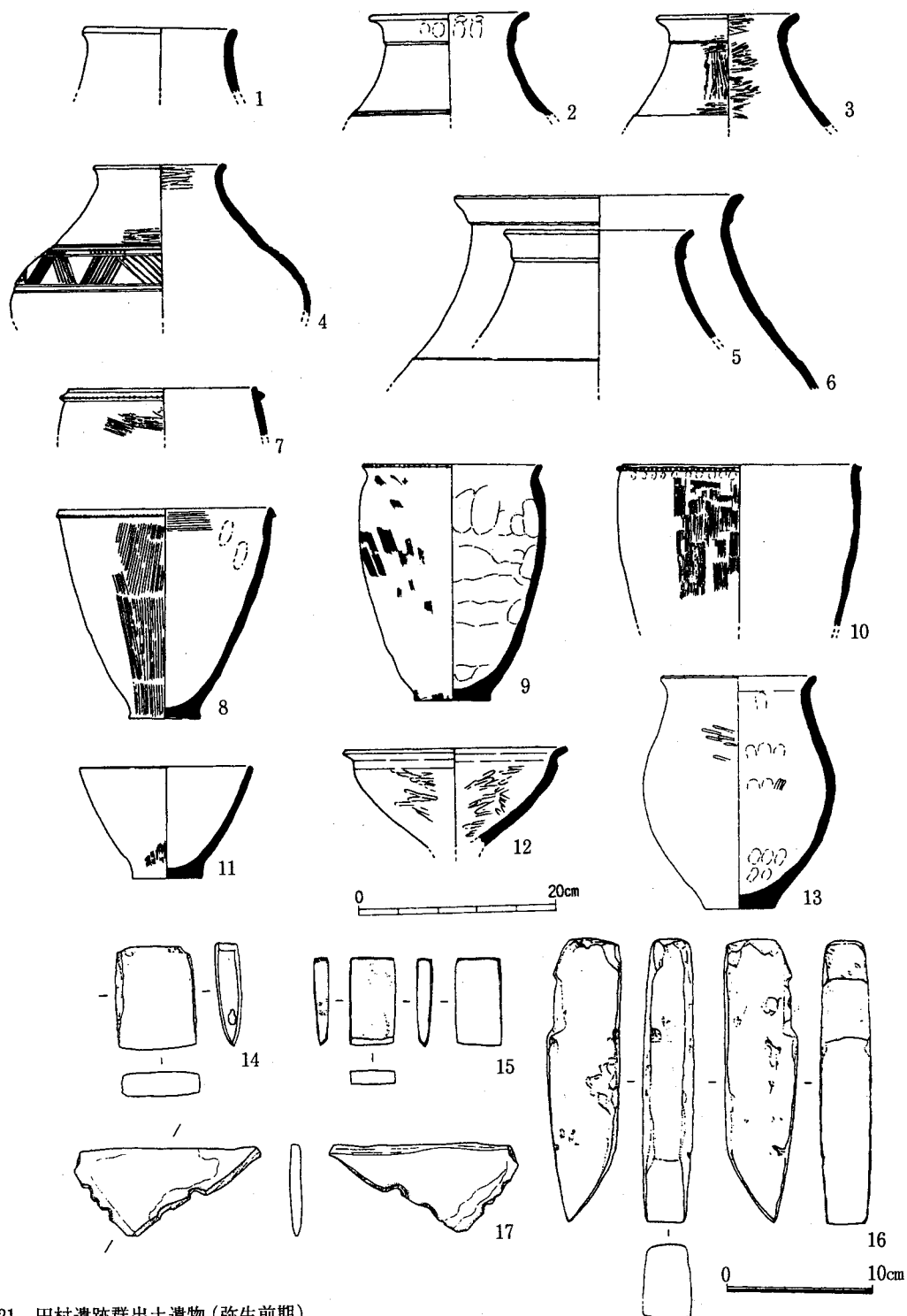


図21 田村遺跡群出土遺物(弥生前期)

1~6: 壺, 7~10: 甕, 11: 鉢, 12: 高坏, 13: 松菊星型土器
14・15: 扁平片刃石斧 16: 柱状片刃石斧, 17: 磨製石包丁

構は竪穴住居の他に、土坑や溝・壺棺などが検出されている。当遺跡の最盛期は田村遺跡のそれと一致するが、終焉においても同時期で、同様の運命を辿っている⁹²⁾。

3・下分遠崎遺跡(図19-16)

香美郡香我美町下分遠崎の香宗川左岸の沖積地にあつて、標高は約8mである。ここでは1986年以降4次にわたる調査が実施されている。前期末から中期中葉にかけての比較的短命な集落遺跡であるが、低湿地に立地することから、県中央部では唯一の木製品を初め、自然遺物が出土している。遺構は掘立柱建物・土坑・溝の他に、土器焼成土坑と考えられるものが検出された。前期土器は少量の遠賀川式土器と共に、極めて地域色の濃厚なものが出土している。中期土器は更に地域性を強めているが、田村遺跡で得られなかった一括性の高い資料が多量に出土しており、土器編年上貴重な資料となっている。木器は鋤・鋤・石斧柄などが未製品と共に出土し、柱穴や溝からは大小の柱・建築部材も出土している。動物遺体はシカ・イノシシ・ツキノワグマ・カツオなどの脊椎が出土している。植物種子では、イネ・メロン・ドングリ・ヤマモモ・ヒョウタンなどを挙げることができる。また、イネのDNA分析の結果、熱帯ジャポニカが存在も明らかとなっている^{93) 94)}。

4・拝原遺跡(図19-18)

香美郡香我美町上分拝原山南川右岸の浸蝕低位段丘上にあり、標高は約19mである。これは後期後半から古墳時代前期にかけての集落址で、11棟の竪穴住居や掘立柱建物・土坑・溝などから構成される。香長平野付近では、弥生前期以来の拠点集落であった田村遺跡が消滅した後に、後期後半に始まって古墳時代前期まで営まれる集落遺跡が多く認められるようになるが、当遺跡もその典型例として位置付けることができる。拝原遺跡の周辺にも稗地遺跡・十万遺跡・幅中遺跡などのような遺跡が見られるが、これらはすべて河川に臨む低位段丘の土佐山田層上に立地している⁹⁵⁾。

5・本村遺跡(図19-15)

香美郡野市町本村の三宝山系から派生した丘陵地の南端部に立地し、標高は約30mである。中期末から後期前半に営まれた集落址で、竪穴住居6棟・土坑3基・溝などが検出されている。当該期には丘陵上に営まれるこの種の集落址やいわゆる高地性集落と呼ばれる山上の集落址が多く認められる。また、南国市の奥谷南遺跡や高知市の福井遺跡・朝倉遺跡なども挙げるができるが、同時に、龍河洞洞穴遺跡や初平ヶ岩屋遺跡などの洞穴遺跡⁹⁶⁾も営まれる。両者の集落の出現の背景には共通の要因が考えられる^{96)~98)}。

6・林田遺跡(図19-12)

香美郡土佐山田町林田の物部川左岸の低位段丘Iの土佐山田層上に立地し、標高は約53mである。これは後期末を中心とした集落址であり、1983年以来、調査が実施されて竪穴住居17棟・土坑等が検出されている。竪穴住居は円形・隅丸方形・方形が見られ、大きさも直径10m程の大型のものと3~6m程度の中・小型住居がある。これらのうち若干の竪穴住居には、廃屋に伴う一種の祭祀行為と考えられる土器の集中廃棄や河原石の集石が見られ、注目される。この他に、鉄鏃やヤリガンナなどの鉄器や水銀朱の付着した磨石も出土している。当該期の集落遺跡は対岸のひびのき遺跡やひびのきサウジ遺跡にも見られる^{99)~102)}。

7・小籠遺跡(図19-31)

南国市岡豊町小籠の通称長岡台地と呼ばれる浸食低位平坦面の西端で、まさに沖積地に埋没する転換点に位置し、標高は約6mである。まず、前期末に確認延長30m・幅2.4m・深さ1.2mの大溝が掘削される。浸食平坦面で検出した大規模な遺構としては最古のものであり、長岡台地の開発史上注目すべき遺構である。その後、中期は空白であるが、後期中葉に至って本格的な集落形成が開始され、後期末から古墳時代前期初めに盛行する集落址である。現在の沖積地には浦戸湾から続く海面が広がっており、津 Ford としての機能を持った集落として捉えることができよう。後期中葉

～古墳時代前期までの竪穴住居は22棟確認されているが、遺跡の広がりから類推すれば、100棟以上を擁する大規模な集落を想定することができる。出土遺物で注目すべきは、阿波・吉備・河内産の土器が搬入されていることである。後期末・古墳時代初頭の竪穴住居には、林田遺跡で見られたような廃屋に伴う祭祀行為が認められる。なお、南国市域には当該期の集落として五軒屋敷遺跡・東崎遺跡・金地遺跡・岩村遺跡・里改田遺跡などが知られている¹⁰⁸⁾。

B-2) 仁淀川流域

1・西分増井遺跡(図19-50)

前述した縄文遺跡との複合遺跡であり、弥生時代に属する遺構は前期の竪穴住居3棟と土坑16基を検出している。竪穴住居の1棟は直径3.5mの小型住居であって前期中葉に属するものであり、仁淀川水系では最古の住居として位置付けることができる。しかも、これは松菊里型住居であって注目される。他の2棟と土坑の多くは前期末のものであるが、南四国特有の土佐型甕が認められないことから、この時期は前期末の中でも古い段階に同定することができる。当遺跡はこれ以後、中後期を通して遺構・遺物の検出が認められず、古墳時代前期初頭になって再び集落が形成される⁶⁸⁾。

2・仁ノ遺跡(図19-53)

春野町仁ノの仁淀川河口の東側に開けた小規模な平野に立地し、標高は2m前後で、海岸線との距離は600mである。遺構は確認できていないが、晩期土器を伴わずに前期前半の土器がまとまって出土している。当該期の土器がまとまって出土した例は、田村遺跡を除くと当遺跡が最初である。対岸の居徳遺跡群では当該期の土器が縄文晩期土器を伴って出土しており、香長(高知)平野における弥生文化の成立を考える上で重要な遺跡である。

3・北高田遺跡(図19-57)

前述の縄文晩期土器が出土した山丘斜面西方の沖積低地の微高地にあり、標高は約6mである。遺構検出面は現地地表下0.5～1mで、厚いシルト層に覆われている。後期前葉に営まれた集落遺跡で、竪穴住居1棟と掘立柱建物13棟・土坑多数を検出している。掘立柱建物を主体とする集落址としては、県下で他に例を見ないものである。この要因が低湿地という立地にあるのか、それとも他に起因するのか、現状では判明し難い。また、これらの掘立柱建物の多くには、溝状土坑が伴っており、田村遺跡の前期初頭の掘立柱建物に伴う舟形土坑との関連性の有無が注目される。当遺跡の遺構検出面の下層に断続的に堆積した層準からは、イネとヒエのプラントオパールが大量に検出されており、水田であった可能性が高い。また、ササ類が随伴していることから、かなり乾燥した状態で堆積が進行していたことが考えられる。

高岡平野で最も広大な面積を占める沖積低地は、波介川によって形成され、この川は対岸の春野町の新川川に連続していて、弥生時代後期にはかなり乾燥した安定した空間が確保され、そこに集落が形成され始めたことを示すものである。このことは当地域の土地変遷・開発史上重要な事項である⁶⁷⁾。

B-3) 吉野川流域

1・銀杏の木遺跡(図19-81)

長岡郡本山町本山東畑の吉野川右岸の高位段丘の大奈路層上に立地し、標高は約246mである。遺物包含層中から前期前半の土器が出土している。四国山間部で最古の弥生土器であり、この地が中部瀬戸内から香長(高知)平野に弥生文化が伝わる中継地であったことを示している。検出遺構は後期中葉の竪穴住居2棟と同後葉の竪穴住居が1棟・土坑等が見られ、当該期の良好な一括資料が得られている。後期中葉の土器は香長(高知)平野とは異なった特徴を有するもので、小地域土

器分布圏の形成を知ることができる。吉野川流域においては当遺跡の他に、中期末の大溝を検出した松ノ木遺跡や後期中葉の土坑一括資料の出土した永田遺跡を挙げることができる^{104) 105)}。

ま と め

高知県の第四系及び土佐湾の海底や考古学的調査の結果、以下のようなことが明らかになった。

1. 南四国の高知県では第四紀において、大きな環境の変化が起こっている。特に、主要な河川流路は顕著な河川争奪を起こしている。たとえば、物部川は上韭生川が本流であり、第四紀の初頭から現在に至るまでは現在の流域を流れていて、キク属の種の分布の相異などの主因となり、物部川バリアと定義している。しかし、仁淀川は現在の鏡川を通じて東流し、物部川下流域から土佐湾に流入していて、これを古土佐川と定義した。また、四万十川も現在の伊与木川を通じて、古土佐湾に流入しており、これを古四万十川と定義した。

2. 以上を通じて、物部川や仁淀川・四万十川の変遷史が、ネオテクトニクスや海水準変動との関連において明らかにされ、各時代での古環境図を明らかにした。

3. 高知県下の考古学的に最古の遺跡は旧石器時代の約2万年前の最終(ウルム)氷期以降であり、後期更新世の低位段丘形成以後に相当する。

4. 更に、考古学的な諸事実からは次のようなことがわかった。まず、旧石器時代の遺跡は約20箇所であるが、縄文時代では約300箇所に増加する。また、弥生時代になると約400箇所になる。

5. 旧石器時代の特徴については、A)西部・B)中部にあつて海成中位段丘上・主要河川の上流域や平野縁辺の山麓・段丘上にもあり、石材の岩質は現地生のチャート・頁岩を使用していて、次の縄文時代以降のような瀬戸内・九州からの搬入は殆どみられない。

6. 縄文時代の遺跡は、A)西部に集中しているが、草創期・早期ではオープンサイトや岩陰遺跡・洞窟遺跡であり、主要河川の上・中流域にある。中期末葉では沖積平野の縁辺部に進出し、後期では平野に出てきて遺跡規模も拡大し、それらの数も飛躍的に増加する。文化内容としては、黒潮を介した東・南九州との交流や瀬戸内との南北交流のクロスロードとしての南四国の位置の確立が認められる。

7. 弥生時代になると、B)香長平野中央部は環瀬戸内の文化圏に属し、田村遺跡で弥生文化が成立し、ここから東西部に伝播していったことが明らかとなった。これは縄文時代以来の南北交流のルートにのつたものであり、当該期の田村遺跡が自然堤防、及び、西南日本外帯に開けた津Fordとしての機能を有していた土佐潟湖の形成がその背後にあった。それ以後、田村遺跡は弥生時代を通して南四国のみならず、西日本外帯に開けた交流の拠点として発展する。

謝 辞

筆者の1人、満塩は1966年に高知大学に赴任して以来、第四紀地質の調査などにおいて、多大なご援助・ご意見をいただいている。畏友、幡多埋蔵文化研究所の木村剛朗所長の研究成果に負うところが多かったことを明記し、深謝の意を表する次第である。

また、本報告を行うにあたり、人間・環境変動研究会の方がたには、常に多大のご協力をいただいている。これらの方々に心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 満塩大洗・甲藤次郎：高知市北西部の第四系。高大学研報, 21, 7-13 (1966).
- 2) 満塩大洗・中村 純・黒田登美雄郎・吉川 治・天野隆介(高知第四紀研究グループ)：高知県南東部の第四系の諸問題。第四紀, 17, 45-23 (1971).
- 3) 中村 純・満塩大洗・黒田登美雄・吉川 治：花粉層序学的研究, その1, 高知県の第四系。高大学研報, 21, 87-113 (1972).
- 4) 高知第四紀研究グループ：領石盆地付近の第四系。第四紀, (16), 171-180 (1974).
- 5) 満塩大洗・吉川 治：高知-室戸間の第四系。日本地質学会巡検案内書, (7), 1-23 (1977).
- 6) 満塩大洗・清水欣一・和田 温：高知県水理地質図, 四国西部地区, (2), 1:15万。農水省中国四国農政局 (1985).
- 7) 満塩大洗：高知県室戸方面の第四系。理科教育, (374), 96-101 (1987).
- 8) 満塩大洗・古川博恭：四国地方の第四紀層。地質学論集, (30), 145-154 (1988).
- 9) 満塩大洗・加賀美英雄・久武精一：室戸半島西海岸域の叶木層(海成中位 段丘堆積層)。高大学研報, 37: 89-96 (1988).
- 10) Mitusio, T.: The middle terrace problems in Shikoku, Japan. *Kuroshio*, sp. v. 4, 187-202 (1989).
- 11) 満塩大洗：室戸面は“中位段丘”に非らず。中川久夫教授退官記念号, 161-168 (1991).
- 12) 満塩大洗・野田耕一郎：花粉層序学的研究, その2, 高知県中央部・南西部の第四紀層。高大学研報, 40, 71-83 (1991).
- 13) 満塩大洗：室戸半島の第四系巡検案内書。四紀研究会, 1-23 (1992).
- 14) 満塩大洗・加賀美英雄：四国の第四系。第四紀研究, 31(5), 297-311 (1992).
- 15) 満塩大洗・川口敏生：南四国物部川流域の第四系。高大学研報, 42, 65-85 (1993).
- 16) 満塩大洗・野田耕一郎：高知県土佐市の第四紀における環境変遷。高大学研報, 43, 101-114 (1994).
- 17) 満塩大洗：高知県香長平野における環境変遷一特に、物部川流域の第四系に関連して一。高知県下における自然災害特質との防災力に関する調査研究。高大教研報告書, 21-39 (1996).
- 18) 満塩大洗：第四紀における土佐湾周辺の環境変遷, 黒潮圏の自然と生物-その過去と現在-。高大理学部公開講座報告書, 39-58 (1998).
- 19) 満塩大洗：完新世(沖積世)における高知県の環境変化-高知県の完新統(沖積層)-。高大学研報, 47, 33-48 (1998).
- 20) 三本健二・満塩大洗：高知県土佐清水市の海成中位段丘堆積層(足摺層)。第四紀, (23), 7-13 (1981).
- 21) 満塩大洗・山下修二：四国四万十川の第四系, 特にその形成史。高大学研報, 39, 109-126 (1990).
- 22) 満塩大洗・西川 徹：高知県西南部の第四系, 特に中位段丘。第四紀, (24), 1-18 (1991).
- 23) 満塩大洗：足摺半島方面の第四系。第四紀学会見学案内, 1, 136-148 (1991).
- 24) 満塩大洗：高知県下の洞窟分布-特に海水準の変化。鹿島愛彦教授退官記念論集, 46-52 (2000).
- 25) 小椋正澄・満塩大洗・吉田泰治, 1989：四国地方の軟弱地盤。土質工学会四国支部30周年記念集, 7-28 (1989).
- 26) 満塩大洗・嶋 将司・竹田善行：高知県吉野川中上流域の第四系。高知大研報, 43, 47-52 (1992).
- 27) Mitusio, T. and Sasaki, T. Quaternary System along the Akui river, east Tokushima Prefecture. *Res. Rep. Kochi Univ.* 47, 12-56 (2000).
- 28) 欽崎智弘・満塩大洗, 2000：東部四国と南部紀伊半島の第四系の比較。鹿島教授退官記念論集, 115-123 (2000).
- 29) 満塩大洗・古川博恭：香川県水理地質図, 四国東部地区, (1), 1:15万。農水省中国四国農政局 (1977).
- 30) 植木岳雪・満塩大洗：阿讃山地の隆起速度-鮮新世三豊層群の研究から-。地質学雑誌, 34 (212), 23-35 (1998).

- 31) 満塩大洗・鹿島愛彦：四国西部の環境地質的研究，その14—四国西南部，松田川流域付近の第四系—。高大研報，45，59-68 (1996)。
- 32) 満塩大洗・鹿島愛彦：西部四国，愛媛県の第四系総括—四国西部の環境地質学的研究，その15。鹿島愛彦教授退官記念論集，93-113 (2000)。
- 33) Mitusio, T. Park, C. and Nishiyama, K. Quaternary System in the Izumi Plain, north-west of Kagoshima Prefecture. *Res. Rep. Kochi Univ.* 47, 12-56 (2000)。
- 34) Mitusio, T. and Watanabe, N.: Hydrothermal Changes of silica gels, part XXIV, Effects of the double salts of Ca and Mg, Part 3, with special reference to chert diagenesis-. *Mem. Fac. Sci., Kochi Univ. ser. E, Geology.*, 14, 22-33 (1993)。
- 35) 満塩大洗：続成学の序論としての風化・変質作用—水圏・岩石圏の地球科学的及び水熱処理実験から—。高大水熱報，9 (2)，7-77 (2000)。
- 36) 満塩大洗：土佐湾の海底地形。高知県百科事典。高知新聞社，633-634 (1976)。
- 37) 満塩大洗：土佐湾北東部の海洋地質—1，極浅海域の底質，そのVI。高大海洋センター研報，7，73-85 (1984)。
- 38) Mitusio, T.: Marine Geology of Tosa Bay, Shikoku, Japan, part 2, Marine geology of very shallow portions, part 7. *Res. Rep. Kochi Univ.*, 34, 61-72 (1985)。
- 39) Guruge, K. S., Okamura, M. and Mitusio, T.: Buried valley off Urado bay, with importance of the Niyodo river route change, Kochi, central Shikoku, Japan. *Kuroshio, sp. vol. 7*, 45-50 (1993)。
- 40) Mitusio, T. and Guruge, K. S.: Marine Geology of Tosa Bay, Shikoku, Japan, part 16, Marine geology of very shallow portions, part 16. *Mem. Fac. Sci. Kochi Univ. ser. E, Geology*, 14, 22-33 (1993)。
- 41) 満塩大洗：高知県の第四系と考古学，その1—考古学の背景—。発掘，高大考古学研究会誌，(4)，19-24 (1985)。
- 42) 満塩大洗：高知県の第四系と考古学，その2—考古学の背景—。発掘，高大考古学研究会誌，(5)，26-33 (1986)。
- 43) 満塩大洗・中島恒次郎：高知県産出土器の胎土分析。高大学研報，34 (5)，1-14 (1986)。
- 44) 十亀幸雄：高知県影野地出土のナイフ形石器。旧石器考古学，29，9394 (1984)。
- 45) 山口将仁：〈土佐の考古学〉高知県における後期旧石器時代の様相。旧石器考古学，41，77-78 (1990)。
- 46) 木村剛朗：四国西南沿海部の先史文化，幡多埋文研，1-918 (1995)。
- 47) 森田尚宏・山本哲也・前田光雄：竜ヶ迫遺跡，ムクリ山遺跡。高知県大月町教育委員会，1-12 (1994)。
- 48) 松村信博・山本純代：高知県南国市奥谷南遺跡。日本考古学年報，49，日本考古学協会，1996年度版，573-577 (1996)。
- 49) 松村信博：未公表資料。(1997)。
- 50) 岡本健児：高知県史，考古編，高知県，7-166 (1968)。
- 51) 前田光雄：尻貝塚。高知県大月町教育委員会，2-22 (1991)。
- 52) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗：高知県片柏遺跡。高知県教育委員会，1-48 (1975)。
- 53) 山崎正明：北川遺跡。高知県東津野村教育委員会，3-46 (1995)。
- 54) 木村剛朗：四万十川流域の縄文文化研究。幡多埋文研，1-475 (1987)。
- 55) 前田光雄：木屋ヶ内遺跡。高知県幡多郡大正町教育委員会，1-60 (1995)。
- 56) 山本哲也・岡本桂典：十川駄場崎遺跡発掘調査報告書。高知県十和村教育委員会，1-90 (1989)。
- 57) 森田尚宏：十川駄場崎遺跡発掘調査報告書。高知県教育委員会，1-40 (1991)。
- 58) 前田光雄：十川駄場崎遺跡。高知県十和村教育委員会，1-70 (1996)。
- 59) 山本哲也：十川駄場崎遺跡発掘調査報告書。十和村教育委員会，1-43 (1988)。
- 60) 木村剛朗：大宮崎遺跡 I。高知県西土佐村教育委員会，1-276 (1999)。

- 61) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗：三里遺跡。中村市教育委員会，1-35 (1978)。
- 62) 曾我貴行：国見遺跡。高知県中村市教育委員会，1-47 (1994)。
- 63) 松田直則・曾我貴行・竹村三葉・武吉眞裕：船戸遺跡。高知県埋蔵文化財センター，1-17 (1996)。
- 64) 岡本健児・片岡鷹介：高知県不動ヶ岩屋洞穴，日本の洞穴遺跡。日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会，平凡社，236-250 (1993)。
- 65) 岡本健児：土佐考古学の諸問題。高知の研究1。清文堂，96-125 (1983)。
- 66) 高知県埋蔵文化財センター：居徳遺跡群現地説明会資料，1998-1999年度。高知県埋蔵文化財センター，6-8・1-6 (1999)。
- 67) 出原恵三・池澤俊幸・久家隆芳：北高田遺跡。高知県埋蔵文化財センター，1-144 (2000)。
- 68) 出原恵三：西分増井遺跡。高知県春野町教育委員会，1-138 (1990)。
- 69) 岡本健児・木村剛朗：永野遺跡出土の遺物。高知県葉山村教育委員会，1-20 (1978)。
- 70) 岡本健児・山本哲也：高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書－姫野々上町・新土居宇津ヶ藪・永野遺跡一。高知県葉山村教育委員会，1-44 (1986)。
- 71) 松村信博：栄エ田遺跡。高知県埋蔵文化財センター，1-222 (1995)。
- 72) 高知県教育委員会：高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。田村遺跡群，第1分冊，23-80 (1983)。
- 73) 山中三男：高知県南国市田村遺跡群の沖積世後期堆積物の花粉分析学的研究，高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。田村遺跡群，第3分冊，高知県教育委員会，493-512 (1983)。
- 74) 山崎正明：林田シタノヂ遺跡。土佐山田教育委員会，1-28 (1993)。
- 75) 岡本健児：美良布遺跡発掘調査報告書。高知県香北町教育委員会，1-12 (1970)。
- 76) 出原恵三：美良布遺跡。高知県香北町教育委員会，1-81 (1991)。
- 77) 森田尚宏：飼古屋陰遺跡調査報告書。日本道路公団・高知県教育委員会，1-76 (1983)。
- 78) 出原恵三：松ノ木遺跡Ⅰ・Ⅱ。高知県本山町教育委員会，1-130・1-65 (1992)。
- 79) 前田光雄・吉成承三：松ノ木遺跡Ⅲ。高知県本山町教育委員会，1-60・1-136 (1993)。
- 80) 前田光雄・出原恵三：松ノ木遺跡Ⅳ。高知県本山町教育委員会，1-82 (1996)。
- 81) 出原恵三：高知県における農耕の起源と発展。土佐史談，212，土佐史談会，1-8 (1999)。
- 82) 出原恵三：四国における遠賀川式土器の成立。突帯文と遠賀川，土器持寄会論文集刊行会，825-868 (2000)。
- 83) 高橋 護：遠賀川式土器の伝播。弥生文化の研究，雄山閣，9，35-44 (1986)。
- 84) 出原恵三：南四国石器－弥生時代の磨製石器を中心として－。古代吉備，第21集，3-41 (1999)。
- 85) 出原恵三：田村遺跡群。日本民俗写真大系，5，日本図書センター，166-167 (2000)。
- 86) 出原恵三：弥生から古墳へ－前期古墳空白地域の動向－。考古学研究，40 (2)，119-139 (1993)。
- 87) 出原恵三：四国西南部における弥生文化の成立。文化財学論集，229-240 (1994)。
- 88) 出原恵三・曾我貴行：中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ，西ノ谷遺跡。高知県教育委員会・高知県埋蔵文化財センター，1-138 (1993)。
- 89) 高知県教育委員会：高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。田村遺跡群，2-5分冊。1-445・1-478・1-375・1-342 (1986)。
- 90) 出原恵三：初期農耕集落の構造。考古学研究，34 (3)，119-130 (1987)。
- 91) 高知県埋蔵文化財センター：土佐の考古学展。(2000)
- 92) 小松大洋・出原恵三・池澤俊幸・行藤たけし：下ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ。高知県野市町教育委員会，1-180・1-270 (1997・98)。
- 93) 高橋啓明・出原恵三：下分遠崎遺跡試掘調査概報・下分遠崎遺跡(Ⅰ)。香我美町教育委員会，1-38・1-98 (1987・89)。
- 94) 出原恵三：下分遠崎遺跡。高知県埋蔵文化財センター，1-100 (1994)。
- 95) 出原恵三：拝原遺跡。香我美町教育委員会，1-99 (1993)。

- 96) 坂本憲昭：本村遺跡。野市町教育委員会，1-157 (1993)。
- 97) 松村信博・山本純代：奥谷南遺跡Ⅰ。高知県埋蔵文化財センター，1-194 (1999)。
- 98) 江戸秀樹・坂本憲昭：福井遺跡。高知県埋蔵文化財センター，1-195 (1999)。
- 99) 森田尚宏：林田遺跡。土佐山田町教育委員会，1-64 (1985)。
- 100) 岡本健児：ひびのき遺跡。土佐山田町教育委員会，1-129 (1977)。
- 101) 高橋啓明：ひびのきサウジ遺跡。土佐山田町教育委員会，1-196 (1990)。
- 102) 高知県埋蔵文化財センター：林田遺跡現地説明会資料，1-4 (1999)。
- 103) 出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治：小籠遺跡Ⅱ。高知県埋蔵文化財センター，1-191 (1996)。
- 104) 筒井敬二・渡辺徳仁：銀杏ノ木遺跡。本山町教育委員会，1-71 (1999)。
- 105) 出原恵三・佐竹 寛・藤方正治：永田遺跡。本山町教育委員会，1-61 (1995)。
- 106) 出原恵三：弥生時代から中世における小籠遺跡の変遷，小籠遺跡Ⅲ。高知県埋蔵文化財センター，1-300 (1997)。

平成12(2000)年10月4日受理

平成12(2000)年12月25日発行